

---

# FAIRY TAIL ~ 魔道士ギルドの一人の少年 ~

水火ノ蘭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～魔道士ギルドの一人の少年～

### 【Nコード】

N6521P

### 【作者名】

水火ノ蘭

### 【あらすじ】

魔法が生きている世界の永久中立国「フィオーレ王国」。  
そんな国の中のひとつのギルド。「FAIRY TAIL」  
その魔道士の中のひとりの少年。常に真っ直ぐ前を向いて進む。その先には、何があるのか？

作者が学生なのでたまにテスト等で、更新が遅れます。基本的には週1更新です。

駄文ですが、それでもよければというかそれでも見てくれる方があ

わが、ふん。

## 主人公設定（前書き）

はい、ちょっと衝動的に書いてみました。

でも、投稿し始めたからには完結まで持っていけます。

今回は主人公設定のみです。

## 主人公設定

主人公設定

ゼル（男）

16歳

容姿・黒と銀が混じったような色の髪に、青い眼。魔法を使っているときは、眼の色が金色になる。

ボーカロイドの鏡音レンが大人っぽくなって目つきが鋭くなったような感じ。

魔法・滅竜魔法を使うが、名の竜の滅竜魔法かが不明。記憶がかなり無いため。

攻撃時は銀色の光線が相手を襲う。防御のときは金色の光線。光線の形を様々に変えて、使用する。

自然の精気や相手の魔力からエネルギーを吸収して、自分のものにする事ができる。これは魔法ではなく、特技のようなもの。

普段の戦闘では、使わない。暴走すると、見境無く吸収してしまうため。

性格・面倒なことは嫌いだが、仕事は真面目にこなしている。一応、ギルドの中では常識のある範囲だが、一般的に見ると変人になる。キレると笑顔になり、敬語がつくようになる。

エルザの次に、ナツたちに恐れられている。キレたときが恐いため。

ある日、フェアリーテイルの前に倒れていたところを、マスターに拾われた。

好きなもの（こと） ・ ギルド ・ 掃除 ・ 菓子作り

嫌いなこと（もの） ・ 面倒なこと ・ 手加減して戦うこと

## 主人公設定（後書き）

次回からストーリーです。

原作第1話からです。アニメ沿いです。

## 1話

### 「ギルド」(前書き)

なんか、いきなり始まった上に駄文だ。

もうひとつの自分の作品のほうで、まだましかもしれません。

あんまり変わりませんが。

## 1話      「ギルド」

三人称SIDE

フィオーレ王国。魔法が国を支えている世界。

たくさんの魔道士ギルドがあり、その中一つに「FAIRY TA  
IL」というギルドがあった。

マグノリアという平和な町にある、大きなギルドだ。

しかし、そのギルドからなぜか

「ドツカアアアアアアアアアアアアアアアアッツンンンン！！！！  
！！」

と爆発が起こっていた。

ギルドの中は、もうもつと煙が立っており何がなにやら全くわからない。その煙の中からは、二人の少年のケンカする声が響いていた。

三人称SIDEOUT

???

SIDE

あー、またかよ。

よくもまあこのギルドは、これだけ俺たちが暴れまわっているのに  
 ブツ壊れることが無いな。ていうかなんで、こんなに煙がたつてい  
 るんだっただけ？

確か、ナツがハルジオンに行けばイグニールに会えるとか騒いでいたような・・・。

それから、グレイが怒鳴ったような……。

そしてナツが、火竜の鉄拳とか叫んだような……。

まあ、どうでもいいか。煙が立っている原因なんて。

俺の昼寝を邪魔をしたんだから、そ・れ・な・りに後悔してもらおうか。こっちは、やっと仕事帰りに手に入れた貴重な睡眠だったんだからな・・・。

[illegible]

煙の中に眼をこらすと、ぼんやりとサクラ色のツンツン頭が見えてきた。その隣には、黒いツンツン髪に、なぜか上半身が裸の奴がいる。

ナツとグレイめ、まだ騒ぐとはどういっつもりだ！！！！

「うぜーんだよ！炎野朗！」

「やかましい！変態！」

俺はそれぞれの意見には賛成だ。しかし、この状況には全く賛成で  
きない。

少し“話”をしようか……………。

桜色の髪のナツの肩にポンと右手を置く。左手はグレイの肩に  
置く。

そして、それぞれの手に“多少”の力をこめる。

「ナツ、グレイ。君たちは、何をしているのかな？」

笑顔とともに聞く。ナツたちは首をカクカクと動かして、こちらを  
見る。

いつも思うのだが、何だって俺やエルザが話しかけるとこいつらは  
ハッピーのようになるのだろうか？

（ハッピーというのはナツにくつついている、しゃべれる青い猫だ。  
ついでに「エーラハ翼」とかいう羽を生やす魔法も使える。口癖  
が「アイ」というおもしろい奴だ）

俺はエルザみたいに口うるさいわけでもないのにな。なんでなんだ  
ろう？

って、そんなことより今は“話”のほうが重要だった。

「俺はな、今まで3日間も闇ギルドを討伐していて、全然寝てなかったんだ。そして、また仕事が入ってハルジオンに行くことになったので、わずかな昼寝をしていたんだよ。それを、君たちはよくも邪魔してくれたねえ」

おまけに仲良くするべきときなのに、ケンカばかりしているしな。

後ろで、ほかの奴が

「地雷ふんだなあの人・・・」

とか

「気の毒に・・・」

とか言っているが、知るか！

「ゼルさん。俺たちは仲良しでございますよ。なあ、ナツ？」

「アイ、アイ」

なんだ、こいつら肩組んで仲良しそうじゃないか。ナツは余計にハッピ―に近くなっているが。気のせいだろ。しかし、またケンカされて昼寝を邪魔されても困る。ここは後一言だけ言っておくか。

「仲良しなのはおいに結構だが、それなら二度とケンカするなよ？ わかったな？」

「アイ」

「・・・・・・・・」

「グレイ、返事は？」

「はい！」

これでいい。これでナツもグレイももっと仲良くなるだろう。問題はないっ！  
そういえばナツはハルジオンと言ってたな、そこに仕事でもあるのだろうか？

仕事があるなら、ちょうどいい。俺も行こうかな。目的地が一緒なら、都合がいいだろう。それをそのまま言ったら、

「ホントか？じゃあ、さっそく行こうぜ！」

と、言われて引っ張られた。元気な奴だなあ。

それから、俺とナツは汽車に乗って、ハルジオンにむかうことになった。

規則正しくゆれる汽車の振動を感じながら、俺は静かに眼を閉じた。  
フアアアア・・・・・・・・。続きが眠れる・・・・・・・・。

・・・その前に、乗り物によって苦しそうにしていたサクラ色の髪  
の奴を、ラクにしておいてやった。ついてきたハッピーが、引き  
つった笑みで「アイ」とか言ってたが、なにかおかしいことをした  
だろうか？

首に一撃を加えて、ラクにさせる方法の何がいけないのだろうか？

## 1話      〽ギルド〽（後書き）

次回からあの星霊魔道士、登場です！

次は、もうちょっと長くします。

今回は短いですし。

## 2話

### ☆星靈魔道士☆（前書き）

ルーシー、登場です！

## 2話

### ☆星霊魔道士☆

???改めゼルSIDE

港町ハルジオン。魔法よりも漁業を発展させたその町では、魔法があまり見受けられなかった。

魔法屋もただ一軒のみ。俺としては、ちょっと魔薬に使う材料が足りないので、買い足しに來ただけだった。短時間で終わる用事だが、しかし……

「えーっ！この町、魔法屋一軒しかないの？」

俺の前の一人の客のせいで、無駄に長引いてしまっている。

金髪を頭の横のほうでくくった女だ。腰に星霊魔道士の持つ鍵を持っているから、おそらくそれが職業なのだろう。年は俺と同じくらいか？

まあ、そんなことよりも早く買つか帰るかしてほしいのだが……

俺にくつついているルーもいらいらと尻尾をふっている。

ルーというのは、ナツのハッピーのように俺にくつついている羽がはえたネコだ。

あまりしゃべらない無口な奴だが、いい奴だ。

しかし、この女、ホントに早くしてほしい。

駅に置いてきたサクラ色が、ぼちぼち待ちきれなくなるころだ。

俺の受けているクエストも、早くやりたいし。ただの不良魔道士討伐だから、すぐ終わる内容だ。とにかく、早く用事を済ませてくれ・

・・・。

「ありがとうございましたー」

店主のおっさんの声が響いた。ボーツとしている間に、あの客は出て行ったんだろう。  
やれやれ・・・。

「すみません。これとこれをください」――

俺は、買い物を済ませた。

ゼルSIDE

チッ！あのバカナツと馬鹿羽ネコめ！すぐどこかに行きやがって！

まあ、アイツが動くと騒ぎがどこかで巻き起こるから、探すのは簡単だが。

そう思って町を回っていると、

「サラマンダー様よー！！」

と、俺の横を10人くらいの女たちが叫びながら走っていた。

サラマンダーというのはナツの異名だが、なんで女たちがあんなに走っているんだ？おかしいだろ。しかもナツには“様”なんて絶対ありえねえし。

考え中・・・・・・・・。よし！ついていくか！

結果として、ナツは見つけ出せた。ついでにその近くにいたハッピーも見つけた。

だが、何故かナツが女たちにボコボコと殴られているところだった。引っ張り出して近くのベンチにナツを落とす。ハッピーはルーが持ってきていた。

ナツはギャツといって、覚醒した。

「なにすんだよー！ゼルー！」

「お前が消えるといつもいつも、町が吹き飛んだり家が崩れたりするんだ！だから、こっちは探してたんだよ！」

「だってよく、イグニールがいるって声がしたんだよ！」

イグニールってのは確かナツの親のドラゴンだよな……。

……ドラゴンが町にいるわけねえだろ！

「ナツ、ドラゴンが町なんかいたら大騒ぎだと思っただが……」

おい！言った瞬間に今気づいたって顔すんな！ハッピーも！

俺がナツに一発、ルーがハッピーに一発、こぶしを落とそうとするとそこに声が割り込んできた。

「さっきはありがとね！おかげで助かったわ！」

……はい？誰ですか？

くるりと振り返ると、そこには頭の横のほうで金髪をくくって、星霊魔道士の鍵を腰につるしている“さっき店で見た”女が立っていた。

場所がレストランに移り……………

「あたし、ルーシィ！よろしくね」

「よろしく」

「アイ」

「……………」

ルーシィ、俺、ハッピー、ルーの順に自己紹介をした。

ルーシィは星霊魔道士で、たまたまこの町に来ていたらしい。

そして、さっきちょっと変な魔道士に「チャーム（魅了）」とかいう魔法をかけられていたらしい。

そしてそして、魔法がかけられているときに、ナツが乱入した結果、魔法が解け、助かったということらしい。

だからナツにお礼を言ったのか。

「ほんと、いけ好かない野郎だったわ。『チャーム』は禁止されている魔法なのに！」

「ああ、少し前に禁止になった魔法がいくつかあったな。その中の一つか……………」

ルーが俺の頭の上で呟いた。ナツとハッピーはさっきから凄まじい音とともに食事をしている。

「もうちょっとゆっくり食べてもいいわよ……………」

「ゆつくり食べるよ。なんか飛んできてるぞ」

俺のほうに飛んできたリングはルーが叩き落した。

それにしてもさっきルーシイが言っていたその「チャーム」を使っている魔道士とか言うのは気になるな。

俺の受けたクエストは、確か違法な魔法を使って、少女たちを誘拐している魔道士を捕まえるクエストだったな。

大方、そいつのことだろう。

「なあ、ルーシイ。お前、そいつの行き先とか知らないか？」

「確か、自分の船で今晚、パーティをやるとかなんとか言ってたよ  
うな……」

それだけ聞けば十分だ。食事に夢中なナツをつつつく。  
人の財布でここまで食うなよ……。遠慮くらいしろよ……。  
。。。

「おい、ナツ、俺はこれからクエストに行くが、お前はどつする？」

「ふえ？ふおふえは、ふいふふいーふふあふいふあふいんふあら、  
ふおふおふおふあふあ」

「ああ、わかった」

「え？今のわかったの？」

ルーシイが聞いてきた。あたりまえじゃないか。

「じゃあ、今なんていったの？」

「え〜と、イグニールがいないんなら帰るんだってさ」

「イグニールって誰？」

ここでナツが食べ物を読み込んだ。

「イグニールは火の竜だぞ。あ〜、それにしてもサラマンダーとか言うから、絶対イグニールだと思ったのにな〜」

それはそうだな。でもお前の異名だってサラマンダーだぞ？

「竜！？」

ルーシイが驚いたような顔をしている。竜は竜としか言いようが無いんだが……。

「竜なら町なんかにいるわけないじゃない！」

あ、それは俺がもう言ったことだ。

で、おい！ナツもハッピーもまた今気づいた！って顔するな！

ルーシイが一つ息をつくとき、財布からお金を取り出して、テーブルの上に置いた。

「あたしはもう行くけど、ゆっくり食べてね」

「ああ、ありがと……」

ごちそうさま……という前に俺はナツに引っ張られて、なぜ

か土下座していた。

ルーはさっさと天井に逃げやがった！

「ごちそうさまでした！」

「でした！」

それかよ！礼儀正しすぎだ！ルーシィや店の人が引いてるじゃないか！

「あ、あたしも助けてもらったんだからいいわよ、べ、別に。おあいこでしょ」

「あまり助けたつもりが無いところが……」

「アイ、齒がゆい……」

なんかズレた会話だがもう何も言わないことにしよう。

結局、そのあとルーシィは店を出て行った。

ナツがああ偽サラマNDERにもらったサインを、お礼とか言ってるルーシィに渡そうとして、

「いらんわ！……！」

と、怒鳴られたのは、見ものだった。

## 2話

☆星靈魔道士☆（後書き）

感想、指摘等々よろしくお願いします。

お気に入り登録2件、ありがとうございます！

### 3話

#### 「新しい仲間」(前書き)

あはは、なんか、変だ。

としか言いようが無いくらい、変だ。

冬休みの変なテンションのせいなんでしょうか？

(絶対、違いますけどね)

それから、ルーの毛の色は灰色です。

### 3話

#### 「新しい仲間」

ゼルSIDE

ルーシィと別れて、数時間後……。

現在、俺はあの偽サランダーの船の中にいる。そして、その船の上で開かれているパーティーに紛れ込んでいる。まわりが女ばつかなのは、多少気になるが。関係ないな。

フード付きのコートを着てるから、顔だってわかんねえだろうし。

実際、ここに来たときも誰も注意なんて払わなかったからな。空から、こっそり忍び込んだってこともあったが。

が、それよりも一つ困ったことがある。ナツがついてきてしまったのだ。

どうやら、帰ろうとしたときにあの偽者が俺たちのギルドである“フェアリーテイル”の魔道士であるという話を聞いたらしい。もちろん俺たちはあんな奴、全然知らない。

つまりあいつは二重に嘘をついていたってことだ。  
一つは、ナツの異名のサラマンダーを騙ったこと。  
もう一つは、フェアリーテイルの名前を騙ったこと。

両方とも、絶対に許せることではない。というわけで、怒り狂っているナツがいるわけなんだが、（もちろん俺もめっちゃくちゃ怒っている。自分の家族と家を汚されたようなものなんだから）ハッピーに船におろされたたん、いきなり船によって、今はのびている状態だ。

情けないような、おかしいような……。

そんなナツをほっというて、パーティーに俺は紛れ込んでいる。あの偽者をすぐボコボコにしてもいいんだが、それはナツにやらせたほうがいいだろう。

自分の名前で、自分のギルドを騙られたんだからな。

と、あー、どうしようと悩みながら考えていると、急に回りの奴らがバタバタ倒れて、グーグーと眠りだした。  
こりゃ、魔法……。

それも人を眠らすことのできるハスリープだな。

誘拐の仕方としては、常套手段だ。

ボーツと突っ立っていると、ハゲ頭やらツンツン頭やらとにかく、乱暴そうな顔をしたやつらが、あちこちから出てきた。多分、あの偽者の用心棒が何かだろう。

一人だけたったままの俺を見て、一斉に襲ってきた。アホだな・・・。

「何でお前だけたってる・・・フゴッ」

「お前！今、何・・・ゲフッ」

「こいつ！強エぞ！」

「ボラさんに知らせ・・・ワギャッ」

「うるさい！人の家族と家をバカにしやがって！おとなしく、吹っ飛ばされてろ！」

俺は怒ってんだよ！

あ、魔法使っわけにもいらないか。船壊しちゃまうと面倒だし。

でも素手でこいつら倒すのも、面倒といえば面倒だな……。まあ、しょーがないか。

「お前らは魔法で吹っ飛ばされると、素手で吹っ飛ばされると……。どっちがいいのかなあ？」

どっちもイヤだー！！！！とか言う叫びは、無視だ無視！

ボコッ！ドカッ！バキバキッ！ドンッ！グシャグシャッ！バリッ！バンッ！ゴンッ！……………

それから数分後……。

とりあえず、全員気絶だ。問題なしだ。

またブーツと立っていると、復活したナツがやってきた。何かをひきずっている。

さっき俺が用心棒をボコボコにしている間に、ルーがエンジンを叩き壊すことになっていたから船が止まったようだ。それでナツが復活したのか。

単純だな。

「なんだよー。もうやつつけちまったのかよ？」

「いや、そうじゃないぞ。まだあの偽者は残っている……。」

はずだ……と言おうとすると、ナツが引きずっていた者を見せた。

あの、偽者だった。

ついでに後ろから、ルーシィとハッピーとルーがやってきた。

ルーシィは、どうやらフェアリーテイルに入れてやると嘘をつかれて、ここにいらしい。

騙されて、奴隷にされかけていたところに復活したナツが乱入。偽者をボコボコにして助けたということらしい。

ん？ナツが今まで誰かをボコボコにして、辺りが無事だったことはあったか？

「なあ、ナツ。まさかと思うけど、この船のエンジンとかを爆破したりしてない、よな？」

「アイ！それはないよ！」

「ルーが、シールドを張ってたからな」

あーよかった。

「でも、船の底の板なら、ナツがぶち抜いたよ」

「エエツーーーーー」

ルーシイが叫んだ。あーあ、やっぱりな。どこかをいつもこいつは壊すんだからな。やっぱりか。

「しょうがないな。ルー、ハッピー。頼むぞ」

「アイ」

「……………」

ルーとハッピーの背中から、翼が生えた。ハッピーはナツを。ルーはルーシイをつかんで空に舞い上がった。ルーシイが、

「空飛んでるー！」

とか叫んでいたが、きつとうれしいのだろう。

俺は、手から金色の光を出して、それをボールのような形にして浮き上がらせる。

中に、寝たまんまの少女たちと用心棒を入れた。船と一緒に沈めるわけにはいかないからな。

まあ、用心棒どもと少女たちはちゃんと分けて入れたが。

それをそのまま、港に投げ飛ばす。邪魔だからな。続いて、今度は自分の背中に銀の羽を生やす。

フワリと舞い上がる。ナツたちのところまで、俺が上昇した瞬間。

下の海面で船が沈んでいた。ボコボコと音を立てて。

まあ、いいか。どうせロクなもん乗ってないんだし……。

「ゼルー」

「ん？なんだ？」

「なんかさっきお前の投げたあの、玉。港、壊してんぞー」

ナツの能天気な声が聞こえた。振り返ると、俺の投げた魔法は港を半分くらいつぶした状態で、停止していた。

ありやりや、投げすぎた。まあ、魔法は自然に解除されて、中の人たちも出てこられるようにしてあるけど。

てっ、騎士団がやってきてるし！あちゃー、やばいなあ。

「ナツ、ルーシイ！逃げるぞー！」

そのまま飛び続ける。

「なんであたしまで」

とルーシイが叫んでいるが、当たり前のことを何で言うんだ？

「だって、お前フェアリーテイルに入りたくて、あんな奴のところ  
にいたんだろ？」

ナツが言う。ナツの右肩の赤いフェアリーテイルのマークが、風に  
ひるがえって吹き飛んだ上着の下から現れる。

「だったら、ちょうどいいじゃないか」

俺が後を引き継ぐ。

「来いよ！俺たちのギルドにな！」

訳がわからない………という顔になっていたルーシイだが、ナ  
ツのマークを見たたん、明るい顔になり、

「うん！」

と最高の笑顔でうなずいたのだった。

### 3話

#### 「新しい仲間」(後書き)

えーっと次、ギルドに帰ってきますね。

後、次はちよつと投稿が遅れるかもです。

もう一つの作品のほうで、とまっちゃったらダメなのでそっちに移るんです。

でも今日中に、その続きを投稿できたら、またこれに戻ります。

早くエルザを出したいんですよねっ！

## 4話

### フェアリーテイル（前書き）

今回は、帰ってきただけの話なんで、短いです。

## 4話

### ハフェアリーテイル♡

ゼルSIDE

「ようこそ！フェアリーテイルへ！」

俺はルーシィにそう言って、ギルドの扉を開けた。ルーも微妙に笑っている。珍しいな。ルーが笑うなんて。

が、ルーが笑ったのは、久しぶりに帰ってきたからではなく、ルーシィがうれしそうにしていたからでもなく、ナツが扉を蹴破って突っ込んだのを見て笑っていた。

黒い奴だ……。

「ただいまぁー……！」

ナツが言いながら、突っ込んだ。そしてそのまま、

「おかえり〜！」

といった一人に向かって

「サラマンダーの情報、ウソじゃねえ〜か〜！」

とけりをかました。またかよ……。

「いきなりなにすんだよ！俺は小耳にはさんだ話を伝えたただけぞ！」

「なんだとコラ〜！」

「やんのかコラ〜！」

ケンカに発展していつている。なんなんだよ、いつもいつも！  
ルーシイも、「なんでえ？」とかなんとか叫んでいる。いきなりだもんな、今回は。

「オラーーーーーッ」

バカナツ！魔法を使うなんて！

「まあまあ、ナツ。そのくらいで……」

と、とめかけたハッピーまで、巻き添えをくらい吹っ飛んでいった。そして吹っ飛んでいく間に、よく弾むゴムボールのようにあちこちのテーブルやらなんやらの間に、ぶつかっていった。

当然、テーブルは倒れ、料理はちらかり、座ってた奴らもそれに巻き込まれ、結果として、

「何なんだよー！テメエらはよー！」

「うつせえ！こいつがぶつかったんだ！」

「ウオオオーーーーッ！」

いつものごとく、ギルド中がケンカ状態になった。

まあ、全員が魔法を使わなければ、とめなくてもいいか……。  
つと、そうだ！マスターを探さないと！

「ミラ！マスターはいるか？」

白髪を頭の上のほうでくくっている少女、ミラを見つけた。

「あら、ゼル。マスターなら奥にいるわよ。どうしたの？」

「あー、あそこの、ルーシイがな。ここに入りたいつていうから報告を……」

しようと思つて……。と続けようとしたとたん、後頭部に何かがぶつかつてそこまでしか言えなかった。何かと思えば、グレイだった。

あー、もう！いくら仲がいいといつても、やりすぎだ！ロクに話ができない！

「ちよつと、全員止めてくるから、二人とも待つてくれ。ルーシイ、すまん。せつかくついたのにうるさくて」

「そ、そんなことないわよ（なによここ）。ゼル以外にまともな人いなさそうじゃないの〜」

俺がルーシイたちから離れ、あいつらに近づこうとした、まさにそのとき、

「アツタマきた！」

と、大酒のみのカナが魔力を集め、

「ぬおおおおおお」

と、ミラの弟のエルフマンが腕を岩に変え、

「困った奴らだ」

と、指輪で魔法をつかうロキが指輪に魔力を集め、

「かかってこーい！」

と、ナツまで拳に火をまとわせた。

こりゃ、もうとめないとヤバイな。しょうがない。

俺はスツと手を上げた。

空中に銀色の壁がうすく現れる。ギルドのフロア全体をすっぽりおおえる大きさだ。ミラが後ろでルーシィを下がらせている。

「アージエントウォール」

俺が叫んだ瞬間、壁が一気に降りた。そのまま、全員の上に押しつぶされない程度の高さでとめる。まあ、全員が床にはいつくばる高さなのだが。

「おい！いいかげんにしろ！カナ！エルフマン！ロキ！ナツ！それからグレイ！ギルドをつぶす気か！」

（結局、ゼルも魔法！ていうか、こんな魔法見たこと無い！）

などとルーシイが思っているような気がするが、気のせいだろう。

「くそ〜！やっぱこれか〜」

「ずるいぞ〜！」

「どこがだよ！俺の魔法だ！」

「俺の炎でも燃やせないじゃないか！」

それこそ俺は知らん！……………だって俺は……………。

「おい！ナツ！」

「あっ！」

……………何やってんだろ俺。あいつらに気を使わせている。そのまま微妙な沈黙が流れていると、後ろで手をパンパンとたたく音がした。

「お〜いゼル！いいかげん、魔法を解除せんか！それにもっといいやめさせ方はないのか？」

俺たちのギルドのマスター、マカロフだ。見た目は小さい老人だが、とてつもない魔力を有している、俺たちの親みたいなものだ。

「あ〜、でも俺のほかの魔法だと、ギルド自体が下手すると無くなっちゃいますから、これが一番いいんですよ〜」

「あいかわらず、お前の魔法は手加減が下手だな」

うつさい！人の頭の上にいる、灰色の性格の黒いネコ！顔がにやつとしているから、楽しんでるのが丸わかりだ！

「なんでもいいから、魔法を消してくれよ」

ナツが床に突っ伏したまま言った。

「ああ、スマンスマン」

俺が手を振り下ろすと銀色の壁はスツと消えた。

「やれやれ……」

アハハ、マスター、そんなに頭を抱えなくなつていいじゃないですか。ギルドは壊れてないんですから。

「あつ、マスター。そいつ俺たちのギルドに入りたいんだってさ」

ナツが起き上がってルーシイを指差して言った。

「星霊魔道士のルーシイです！」

「ふん、まあよろしくネ」

そのままマスターは、掛け声とともに二階まで二回転ジャンプをした。そのまま、華麗に着地！……すれば良かったのだが……。

手すりに「ゴチン」と頭をぶつけた。だが、マスターは何も無か

ったように手すりに登った。

手にはなにかの書類をにぎっている。・・・多分、あれは…………。

「まゝた、やってくれたのお。貴様ら…………。これを見る！  
この評議会から送られてきたこの文書の量を！」

げ！魔道士をたばねている機関がなんのようだ！

「まず…………グレイ！密輸組織を壊滅したはいいが、そのまま  
素っ裸で町をふらつき、あげくのはてに干してある下着を盗んで逃  
走！」

「いやだつて、裸じゃまずいだろ〜が！」

ちよつとちがうだろ！

「カナ！経費と偽って某酒場で飲むこと、大タル15個！しかも請  
求先は評議会！」

「…………バレたか」

よく飲めたな、あんな細い体で…………。ルーシイまで、あきれ  
た顔をしている。

「ロキ！評議員レイジ老師の孫娘に手を出し、某タレント事務所か  
らも損害賠償の請求が来ておる！」

ルー、ひっそり笑うな！何がおかしいんだ！

「そして……ナツ！盗賊一家を壊滅するも民家7軒を壊滅！  
チューリー村の歴史ある時計台を倒壊！フリージアの教会全焼、ル  
ビナス城一部損壊、ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止！」

ナツの魔法だから、火事じゃないだけいいかもな。

「さあらあにい……ゼル！」

あちゃ。俺もかあ。

「お前が前回受けたクエスト！闇ギルド討伐！」

ああ、なんか1つだけ討伐する予定だったのに、行ってみれば2  
4個の闇ギルドが、俺をつぶすためとか何とか言つて、同盟を組ん  
でたから全員まとめて吹っ飛ばしたあれか……。

（ゼル……一体何を……）

という視線が、みんなから飛んできたような気がするがそれより俺  
は一体何をしたことになってるんだ？

「闇ギルドを4個壊滅させるも、あたりの地面に巨大なクレーター  
を形成！さらに湖に船で逃げた闇ギルドの残党を倒す際に、湖を吹  
き飛ばし、周辺の地形が変形！」

（エエ~~~~~~~~ッ！！！！！！！！）

「マスター、地形は変えちゃいましたけど、漁師さんに怒られたの  
で、何も無かった地面をちよつと吹っ飛ばして湖にしてみましたよ  
！。それじゃダメですか？」

ちゃんと水まで運んだのに……。

（ゼルが一番まともだと思ってたのに……………）

と、ルーシイの呟きが聞こえたように思った。

「アルザック！レヴィ！クロフ！リーダー！ウォーレン！ビスカ！それに他の奴らも！わしは評議員に怒られてばかりじゃ！！」

ブルブルブル……とマスターは怒る前のように震えていた、が、次の瞬間

「評議員などクソくらえじゃ！」

とマスターは手から出した炎で、書類を燃やした。投げ捨てたそれにナツが食いついた。

「よいか……理を超える力は全て理の中より生まれる。

魔法は奇跡の力なんかではない、我々の内にある気の流れと自然界に流れる気の波長が合さり、始めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや、己が魂全てを注ぎ込むことが魔法なのじゃ！上から覗いてる目ん玉氣にしてたら魔道は進めん！」

「評議員のバカ共を恐れるな！自分の信じた道を進めえい！それが“フェアリーテイル”の魔道士じゃあ！」

そう言って、マスターは人差し指を天に突き上げた。全員がそれに答えて、歓声を上げる。

ハハッ！やっぱマスターはマスターだなっ！

## 4話      ♪フェアリーテイル♪（後書き）

マスターのセリフ、原作そのままのような……。

後、主人公はエバルの屋敷には行きません。マカオ救出には行きますけど。

一応、オリジナルストーリーのクエストにでも行く予定です。

変更、ありえますけど。

それから一言でもいいので、感想をいただきたいです。  
お気に入り登録、10件ありがとうございました！

## 5話

## ハコへ山（前書き）

駄文です!!!

注意です!!!

## 5話

### ハコベ山

三人称SIDE

マグノリアの町のフェアリーテイルの前にクエストから帰った、ゼルとルーがいた。

「あゝ、つかれた」

「今回は余分なところ、壊さなかったな」

「失礼な！」

二人がそんな会話をしていると、突然ギルドの扉が開き、子どもが一人走り出てきた。

フェアリーテイルの魔道士の一人、マカオの息子のロメオだ。

「くそくそお」

泣きながら走り出てきた。なにかあったようだ。  
ゼルとルーは顔を見合わせながら、ギルドの中に入っていった。

「ナツ、今ロメオが走って行ったんだがどうかしたのか？」

「ちょっとな……。俺、ハコベ山に行ってくる……………」

ナツまでどこか暗い顔をしている。こんな雰囲気の中、お人よしのゼルが放っておくわけも無く、

「なんか知らないけど、俺も行くわ」

と、ナツについていくことにした。

## ゼルSIDE

「あゝ、つまりマカオがハコベ山に行ったまま戻ってこないから、探しに行くことにしたんだ。そして、なぜかルーシイもついて来て、今に到るんだ……」

「……そういうこと……ウブッ」

「ほんとーにナツって乗り物に弱いよね……」

現在、俺、ナツ、ルーシイ、ハッピー、ルーはハコベ山行きの馬車に揺られている。

クエストに行ったまま、帰ってこないマカオを探しに行くそうだ。ナツも親のイグニールが帰ってこないから、残されていたロメオと自分がダブって、放っておけなかったとか、そんなところだろう。って、それよりも一つ言っておかないといけないな。

「ルーシイ、その格好だと寒いと思うぞ」

「え？どういうこと？」

知らなかったか……。まあ、あたりまえか。

「お前、知らないのか？」

「ルーまでどうしたの？何のことよ？」

ホントに知らないんだな……。

ここで御者さんの声が入ってきた。声とともに、馬車も止まる

「お客さん、ここからはムリですわ」

ナツがその瞬間に復活したが、ほっというて大丈夫だろう。

「ハコベ山は町からそんなに遠くないが……」

開いた扉から冷気が吹き込んで……

「一年中吹雪いている……雪山なんだぞ」

人を寄せ付けない雰囲気 of 雪山が現れた。

「ついでにモンスターもたくさんいるしな」

ルーが付け加えた。

「エエエエエッーーーーー」

・・・ルーシイ、だから言っただじゃないか・

場所が移り・・・・・・・・。ハコベ山中腹あたり・・・・・・・・。

「マカオーーーーーッ!!!!!! いるかああ!!!!!! 返事しろーーーーー  
ー!!」

「バルカンにやられちゃったんじゃないだろうなーーーーー!!!!!!  
!!!」

現在、俺とナツは二人で叫びながら歩き回っている。

ルーシイはホログラムとかいう、時計型の星霊の中に入っている。  
ミニスカートの格好じゃ、やっぱり寒かったらしい。

後、マカオのクエストの内容が凶悪モンスター、バルカンの討伐と  
知って、帰りたいといっているようだ。

それくらいは我慢してくれ・・・・。

「なあ、ルー。バルカンってどんなモンスターだったっけ？」

「知らないのか？」

忘れたんだよっ！

「確か、人間を吸収テイクオーバーして命をつないでいる奴だな。見た目は白いゴリラだな」

吸収……。もしかして……！！

「おい！ナツ！バルカンが来たら……。」

倒さずに捕まえる！という前に、俺の眼に入った光景はナツの上に白いゴリラが降ってくる場所だった。

ナツは横に飛んで回避した。そのまま魔法を繰り出す、バルカンのほうも以外にすばい動きで回避した。

「ナツ！そのバルカン、多分マカオだ！」

俺が叫ぶと、それに気をとられたナツの横をバルカンが駆け抜けた。以外にすばい。

俺のほうに向かってくる……。かと思いきや、魔力を高めていた俺の横をもの見事に、駆け抜けた。

そして、そのバルカンがつかんだのは、ホログラムだった。ルーシイが中に入ったままの。

人を無視しやがって……！！！！

「オンナ！オンナ！」

「てか、助けなさいよ」と申しております」

空しい叫びを上げるホロロギウム（中にはルーシィがいる）は、エロ猿に担がれて吹雪の中に消えていつてしまった。

まあ、大丈夫だろう。

再び場所が移り。現在、飛行中。ナツはハッピーが持ち、俺は自分で羽をはやして飛行している。

「だあかあらあ、あのバルカンてのは、人を吸収して生きてるモンスターなんだよ！」

「それでえ？どういうことなんだ？」

「つまりだなあ、マカオが受けたのはバルカンの討伐だろ。クエスト中に、何かが起こって吸収されちゃったってことだと思うぞ」

「はあああ？どうすればいいんだよあ？」

ナツがやや暴れる。落ち着け落ち着け……。

「落ち着けよ。大丈夫だよ。バルカンの体を傷つけても吸収されてるマカオには、ノーダメージのはずだよ」

「つまり、あのサルをぶったおせばいいんだな!!」

「まあ、そういうことだ!!!!」

ルーシイも気になるしな。

「おい、ゼル。なんか今、叫び声が聞こえたぞ!」

そのとき、ルーがそう言った。

「あ、俺にも聞こえた!」

ナツも言う。すごい聴覚だな二人とも。

「どこから聞こえたんだ?」

「あっち!」

と二人はそろって、洞窟?らしきところを指差した。バルカンの住処かなにかだろうか?

「よし!じゃあ、突っ込むぞ!」

「アイ!」

「おおー……!!」

よくわからない叫びとともに俺たちはその洞窟に突っ込んでいった。

## 5話

### ハコへ山（後書き）

冬休みなのに、冬期講習とかどうなってるんでしょうか???

冬期講習等々により、更新できませんでした!!  
すいません!!

それから、年末は親戚が来たりするので、更新は停滞気味です。  
ご了承ください。

## 6話

### へ崩した山（前書き）

なんか主人公の、めんどくさがりが作者と似ている——！！

などというんでもないことを、友達に言われてしまいました。

地味に凹んだ……。わたしはそんなにめんどくさがりなのか……。

全然関係ないことを最初に書いてしまいました。（前書きに何を書いてんだろ……）

6話、どうぞ！

## 6話

### へ崩した山

ゼルSIDE

バルカンの洞窟(?)にて・・・。

「なんか怪物ふえてるしー!!!」

洞窟につつこんだ瞬間、俺とナツがこの言葉を同時に叫んだ。

洞窟の中には、ウホウホわめいているバルカン。それでその正面にルーシィ。(無事でよかった。)

そして……ルーシィのとなりに、何故か二本足で立っている“牛”がいた。でかい斧までかついでいる。

あんなモンスター見たこと無いな……。

俺が攻撃しようか迷っていると、ナツがすでに牛のほうにとび蹴りをかましていた。

「きゃあああ!!それ、あたしの星霊

!!!!!!」

ナツのとび蹴りが決まったとたん、ルーシィが叫んだ。  
あちゃー。あの牛、星霊だったのかあ。

「あつ、ゴメン」

なんとなく俺が謝った。ナツはなんかわかってないような顔をしている。

「ウホウホウホオオオオオオオオオ!!!!!!!!」

ここでバルカンが突っ込んできた。俺は空に飛んで回避。ナツは、地面を転がって回避。

「なあ、ゼル!こいつ倒せばいいんだよな!!」

「ああ、そのはずだ!!」

「よっしゃああ!!」

ただ倒せばいいだけなんだから、ラクだ。俺も参加するつと!!

「ナツ、おまえブレスなんて吹くなよ。ここ氷だからな、溶けるぞ」

すでに足元で魔方阵が展開していたナツは、「げっ」と言うような顔になって俺の方を見た。

吹くつもりだったのかよ・・・。

「俺がやるよ」

そういつて俺は、前に出た。両手に魔力を高める。

バルカンも俺の方を見て、突っ込んでくる。

壁を壊さないように、調整・・・。魔力をおさえる。これは下手なんだが、まあしょうがない。

・・・よし、十分に高まった。

来いや!バカザル! マカオから出て行きやがれ!!!

「銀竜の・・・鉄拳!!!!!!」

俺が魔力を抑えた分、力をこめた拳は・・・  
・ものの見事にバルカンのアゴに食い込んだ。

よし!!!

・・・が、しかし次の瞬間、洞窟がベキベキと音を立

て始めた。俺が殴り飛ばしたバルカンの体が、壁にぶちあたって網目模様のヒビを生み出したようだ。

「ゼル。結局、こうなるのかよ」

後ろで、ナツがぼやいている

「すまんすまん。なんかバルカンが思っていたより軽かった」

「てか、崩れてきてるわよ」

ルーシイが絶叫している。

「ルー、ルーシイをつかんでくれ。ハッピー、ナツを頼む」

なんか、最近ルーたちに運ぶことばかりやらせているような気がする。しかし、この瞬間にも壁がどんどん崩れてきているのだから、時間が無い。

「おい！ゼル！お前はどーすんだよ！」

ナツがハッピーに抱えられたままジタバタと暴れながら言う。

俺は飛べるんだから、大丈夫なんだよ！

「バカか！マカオがいるだろ！アイツ、連れて帰るんだよ！！お前ら、先に行つとけ！！」

視界のすみで、ルーとハッピーが飛び立っていくのが見えた。

洞窟はいまだ、悲鳴を上げ続けている。あちゃー、マジで崩れそうだわ。俺のせいだけだ。

俺は再び翼を生やして低空飛行でバルカン（マカオ）を拾い上げた。  
ぐげっ、重いっ！てか、俺の身長の倍以上だっ！！

それでも、連れて変えるっ！！ロメオが待ってんだからな。エロザ  
ルに取り込まれたままとか、何の冗談だよ。  
待つてる奴がいるところに、ちゃんと帰らせないといけないんだよ！

ハコベ山上空。

三人称SIDE

ナツ、ルーシィ、ハッピー、ルーの二人と二匹が洞窟を抜けたとき、  
ちょうどハコベ山が崩れるところだった。  
頂上近くの洞窟で、ゼルが乱闘を起こし、壁に亀裂を生んだことが  
原因で、そのまま山が崩れてしまったようだ。

が、二人と二匹にはそんなことはどうでも良かった。仲間がまだ二人、崩れた山の中から出てこないのだ。もっとも二匹といっても一匹は普通の表情をしているのだが。

「ゼルーーーーー！マカオーーーー！」

「いるなら、返事してーーーーー！！！！！」

ナツとルーシイは必死に叫んでいる。

しかし、返事は無い。

ハッピーもキョロキョロと辺りを見回している。

その中で、ルーだけはいつものどこかにやけているような顔のまま、一点を見つめていた。

そこはかつてハコベ山の頂上だったあたりであり、最も崩れているところだ。

辺りを見回していたナツとルーシイもルーが見ている一点に視線を向ける。

そのガレキの中心から金色の光が見え始めた。はじめは弱い光だったそれは、次第に強い光となっていく。

やがて、その光はドームのような形となり、ガレキの完全に跳ね除けた。

そして、その中心から銀の翼を生やし、肩にマカオを引っ掛けたゼルが現れた。

「はへっつ。山、つぶしちまってたのか」

かなり、眠たそうな顔をしたまま。

### 三人称SIDE OUT

#### ゼルSIDE

はあ、山、崩れてたのか。まあ、いくらなんでも崩れてくる岩だのなんだのが多すぎるわけだ。雪崩とか起こってねえだろうな。マカオはまだ岩とかが落下してくるときに、バルカンから元に戻りやがるし、タイミングを計って元に戻ってほしかったな。ムリなのはわかってるんだけどさ。

「ゼルーーーー!!」

おっ、ナツとルーシィ、ちゃんと脱出できたのか。よかったよかった。

「こんのヤローーーーー!!」

「ぎゃう！」

いきなり蹴り飛ばすとかナツの奴何考えてんだ！！

「何すんだよ！！このヤロー！」

一応、けが人のマカオ、背負ってんだぞ！！

「バカーーーーー！！！」

ルーシィまで、何で俺を殴るんですかーーーー！！ルー、助けるよ  
ーーーー！！

ハッピーまで小っさい拳で人を殴ってるし！！地味に痛いし！！

「なにになに何すんのさーーーー！！！」

「心配させやがってーーーー！！！」

「そーよっ！！なかなか出てこないしっ！！！」

それかつ！！！！・・・あー、まあちよつと自力だとやばかった  
かな？

でも“これ”が作動するんだから大丈夫なんだけれどもな。

「悪い悪い。でもナツ！！お前“これ”があること知ってるだろ！  
！！」

おい！！今思い出したって顔すんな！！ルーシィは知らなくて当たり前だが。

「ねえ、“これ”って何？」

ああ、やっぱり知らなかったか。

「これだこれ」

そういつて、俺は首にかけていたメダルを取り出した。金色で俺の手のひらくらいの大きさのそれは、きらきらと輝いていた。表面のウロコ模様が小波のように小さく光る。

「あ、きれい……………」

ルーシイが呟いた。まあ、俺も見慣れてるけどきれいだな。うん。

「これはな、なんか俺にもよくわかんねえんだけど、魔法をこめられるんだよ」

容量には限界はあるが、かなりの魔力もこめられるな。うん。

「それでな、例えば俺がこれに攻撃を防いでくれる魔法をこめたとすると、俺がピンチになって攻撃とかを防ぎたいと思ったときに、こめた魔法が勝手に発動してくれるんだよ」

「えっ！！！！何気にそれ、すごくない？」

「そう……………いうことになるかな？」

俺にもよくわからん代物だ。フェアリーテイルに来たときに、首から提げていた物だからな。

「だからあのときは俺が盾の魔法をこめていたから、岩に当たりかけたときにそれが発動してくれたんだよ」

実際、それで助かったしな。

「おい、ゼル。その説明なんてどうでもいいから、マカオがヤバイぞ」

ルーの至極冷静な声に、担いでいたマカオを、雪原に下ろした。

「吸収される前に、相当戦ったみたいだね」

ハッピーもナツを下ろして、近寄って来てそういう。確かにあちこち傷だらけだ。何匹のバルカン倒したんだか……。

「ちょっと離れてくれ、魔法使うから」

そういつて俺はマカオの傷の一つに両手をかざした。

「金竜の……息吹」

小さく呟くと俺の手から金色の光があふれた。俺の魔法の一つ、“金竜の息吹”だ。このブレスは攻撃系ではなく、相手の傷を治したり魔力を高めるものだ。

まあ、手から魔法が発動する時点で、すでに息吹と呼べない魔法なんだが……。

つと、今はそんなことより治療だった。

「よしっ！傷治したっ！」

「おおー！いつ見てもその魔法すげえな！」

「うそ…………。傷が全部治ってる…………」

へへっ、ルーシィ、びっくりしてるな。これで、マカオの傷は全部消えたから、後はフェアリーテイルに帰ればオーケーだ。あー、でも俺、魔法使いすぎて眠いな。

「フアアアア…………。ナツ、悪い。俺ちよっと、眠いから。適当に運んどいてくれ」

あー、なんか叫んでるような声が…………。もういいや、俺は眠いんだ…………。寝よ…………。

## 6話

### ハ崩した山（後書き）

主人公は手加減が下手なんですよね。だから山を崩しちゃったんですけれども……。

後、主人公設定に書いていみせんでしたが、ゼルのフェアリーティルのマークは、右の首筋です。

それから、ギルドのけんかを止めるときにゼルが言った魔法の名前と、今回言った魔法の名前が違います。あの壁を作るときだけはゼルはあの魔法の名前をつかうんですよ。（特に、意味は無いんですが）

## 7話

### ハエルザ（前書き）

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

ちょっと、原作とからんでいるオリジナルストーリーっぽくなりました。

7話、どうぞ

## 7話      へエルザへ

ゼルSIDE

「あー、今月の家賃……」

俺はギルドのカウンターの前で、頼りない重さの財布をふりながらそんなことを呟いていた。

「まあ、クエスト受けたらいいじゃないか。ほれ、前に本を取って来るだけで20万ジユエルの報酬がでるやつあっただろ？」

「うつさい！！灰ネコ！！あのクエストならナツとルーシイが受けたんだよ！！さっき出発したじゃないか！！」

「八つ当たりだー。理不尽だー」

ぐだぐだと人の頭の上で言う羽ネコ。俺の家賃がなくなったのは誰のせいなんだよ！！！！

「元はと言えばお前達が、この3日間でバカみたいに食費を消費したことが原因だろ！！」

そう。俺がこんなことを叫んでいるのも、この灰色のネコ、ルーに起因しているのだ。

「だって、それはお前が最近、俺やハッピーを働かせてるから飯を奢ってやるとか言い出したんだろ？」

「ああ、そうだよ。ハコベ山でもハルジオンでも最近頼みごとばかりだったから、飯を奢ってやるとは言ったよ！」

あの翼は<sup>エーラ</sup>疲れるとルーがこぼすので悪いなーと思ってたんだよ！！  
・・・・・だからってなあ。

「なんでハッピーはともかくとしても、ナツまで呼んで俺に飯を奢らせतんだよ！！しかも三日連続で！！」

ミラー。そんな同情の眼でこっちを見るのはやめてくれー。あのと  
き料理を出してたのはお前だろー。  
ハッピーとルーだけならまだ許容範囲だったんだが、あの火竜の<sup>サラマダー</sup>大  
食いは恐ろしいほどだった。

「あはは。だって面倒ごとで言えば、ナツにも助けてもらってたじやないか。だから呼んだんだが・・・。  
悪かったか？」

ナツに迷惑をかけたのはその通りなのでこう言われると、何も言えなくなる。

「ほれほれ、わかったのならリクエストボード（ギルドに持ち込まれる依頼書が貼つてある板）から仕事を取ってくるんだー。急げ急げー。家賃のためだぞー」

「わかったよ」

と、俺はしぶしぶカウンターから降りるとリクエストボードの前に立った。

ゼルSIDEOUT

三人称SIDE

「んー。どれにしようかな？<呪われた杖の魔法解除>、<魔法の腕輪を取ってくる>、色々あるな」

「早く決めろよー」

リクエストボードの前でのんきに依頼を見ているゼルとルー。ルーにはゴチャゴチャと言っていたゼルだが、本人は仕事をする事自体は好きなので、楽しそうに仕事を選んでいる。

そしてゼルはこのとき、ギルドの雰囲気が変わっていることに気づかなかった。先ほどまでのにぎやかな雰囲気が一変し、緊張感が漂っている。いわばピリピリした状態だ。

その“原因”は、ガチャガチャと自身の纏っている鎧の音を響かせ、フェアリーテイルの入り口に姿を現した。そして真っ直ぐにリクエストボードにむかって歩いていく。

そこにはいまだに依頼を決めかねているゼルとルーがいた。

「うー。やっぱ、家賃のためだし報酬の高い奴にしよう」と

「じゃあ、これはどーだ？「魔獣退治」。報酬25万ジュエル！」

「それにする！！」

と言って、ゼルは依頼書に手をのばした。しかしその手は鎧の籠手と、依頼書の前でぶつかることになった。ここでゼルはやっと顔を上げて、その鎧の持ち主の顔を見た。

長い、腰までもありそうな真紅の髪。鈍く光る鎧。

そして鋭く光る眼とゼルの視線がぶつかった。

「んあ？エルザ？」

ゼルはどこまでものんきに声を上げた。

「いつ帰ったのさ？」

ルーも聞く。

「・・・・・・・・たった今だ」

エルザと呼ばれた人物はあきれたような声で言った。そしてさらに言葉をつむぐ。

「お前たちは相変わらず、周囲の気配を感知しないな・・・。そんなことでは敵に背後を取られてしまうぞ？」

「俺だって仕事的时候は敏感なんだよ。今はここにいるからないんだよ、別に」

ゼルはそう言いながら依頼書をリクエストボードからはがそうとする、しかしエルザの手も全く同じ動きをした。結果、ビリと小さな音を立てて紙に小さな割れ目が生じた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「どっちかが手を放さないと、それ破れるぞ？」

ルーが言った。後ろでは他の魔道士たちが

「またかよ・・・・・・・・」

とか、

「よく被るな、あの二人」

とか、

「今度はどうなるのかな？」

などと言っていたようだ。当事者のゼルとエルザは全く持ってそれに気づいていなかった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

双方無言という一種不気味な状態ではあり、辺りに注意を払えていなかったということもあったが。

「おい、どっちか手を放せよ」

ルーが再び、至極まともなことを言った。すると二人は、

「そっちの仕事だな」

と、同時に言って依頼書から手を離れた。当然、フワフワと一瞬虚空をただよい、床に落ちる依頼書。カサリと小さな音がした。そして今度は二人は、

「すまん」

と言って再び同時に言って今度は、依頼書を拾おうとしゃがんだ。全く同じ動きとタイミングだったせいかな、二人の額は

「ゴチン」

と鈍い音をたててぶつかり合った。無言で額を押さえる二人。ルーは華麗に二人をスルーし、床に落ちていた依頼書を拾った。それをヒラヒラと二人の目の前で振る。

「ハイハイ。そっくり同じことを繰り返すお二人さん。どっちでもいいからこの依頼を何とかしようよ」

ややあきれたような口調でそう言った。

後ろのカウンターでは、ミラとマスターが声を殺して笑っていた。他の魔道士たちは笑うどころではなく、

「またかよ」

と完全にあきれていた。ゼルとエルザは顔を合わせるたびに、同じような行動や言動を繰り返すので、会話がなかなか進まないのだ。たいがいルーが口を挟んで、会話が成り立つのだが。そして今回も、

「じゃあ」

「

と、ゼルが言えば

「また」

「

と、エルザが口を開き、

「前みたいに」

と、声をそろえ、最後には

「二人で受けるか。報酬を分ければいいんだし」

と、完璧にそろって言葉を結んだ。ゼルとエルザが頭を抱える。毎回、行動がかぶることに二人としては自覚はあるのだが、かぶるときはかぶるので二人としては何ともできないのだ。それが原因で、ルーにはからかわれ続けている二人なのだ。

「まあ、いいや。んじゃ、俺がハンコもらってくるから、後で駅でな」

ゼルはそう言って、カウンターに依頼書を持っていった。エルザはきびすを返し、ギルドの出口に向かっていった。

「ミラ、これにハンコ、よろしく」

「ハイハイ」

ポンツと軽い音とともに、依頼書にハンコが押された。

ゼルはそれを持って、ギルドの外へ走り出て行った。

残った魔道士たちは、誰彼ともなく呟いた。

「姉弟みたいだな……………」

と。

ゼル  
SIDE

三人称  
SIDE  
OUT

「ゼル、依頼と言うのはどんなものだ？」

「魔獣退治だ。何でもとある村の近くに出没して、家畜やら穀物やらを食らったり、村を破壊したりしているので、退治してほしいみたいだ」

「簡単そうだな」

「ああ、そうだな」

現在、俺とエルザとルーは汽車に揺られている。エルザは凄まじい量の荷物を持ってきていた。（毎度のことだが、なぜあんなに荷物がいるのか全くの謎だ）

「相変わらず、お前たちは依頼が被るなあ」

ルーが俺の頭の上で腕組みをしながらそう言った。

そうなんだよな。なんかエルザが受けようとする依頼と俺が受けようとする依頼は同じなんだよな。言いたいことや行動も同時になっってしまうし。なんでなんだろな？

「そういえば前のとき、乗り物酔いしたナツを“ラクにする”方法まで同じことをしたもんね。あれは笑えたわ」

ああ、あれか。前に俺とエルザとナツで受けたあのクエストに行くときのあの出来事か。

「確か、私が腹を殴って、お前が首を殴ったんだよな」

「ああ。でもそれでナツはラクになってたからいいんだろ？ルーは

めちやくちや笑ってたが」

「そうだな。そう言えばハッピーはあるとき、なんか引きつった笑いをもらしていなかったか？」

「笑いというより、ハアイとかなんとか言ってたよな」

後でナツにも怒られたし、なんか変なことしたのかな？  
しかし、そこらはどうでもいいや、もう。

とりあえず！今は家賃と食費のためだ！！クエストの完了に全力を注がねば！！

と、一人で拳を突き上げたら、エルザに笑われた。

それから数時間後。

「はーっ。なかなか深い森だなー」

「そうだな。情報によると魔獣はこの辺りに出てくるはずなんだが・  
・・・・・」

再び場所が移り、俺たちは実に深い深い森を歩いている。汽車で依頼を出した村にたどりつき、多少の説明を受け、さっそく魔獣討伐に向かっているわけなんだが

「何がこの道を歩いていると、すぐ出会いますから、ぜひ退治してくださいっ！！」だっ！！」

叫んでしまいたくなるほど、魔獣の“魔”の字すら無く、延々3時間森を歩き続けているのだ。エルザは無言でさつき換装した剣を握っている。

エルザは「換装」という、自身の武器や鎧を一瞬で変化させる魔法を使う。名称は騎士<sup>ザ・ナイト</sup>だ。そしてエルザは妖精女王<sup>フェアリーニア</sup>と言われる異名目で持つ、フェアリーテイル最強と名高い女魔道士なのだ。

そんな最強魔道士がさつきから無言で剣を握っていれば、別の意味でも、とつとと魔獣にご登場願いたくもなるだろう。お気楽なルーも、黙ったまま飛んでいる。

「ゼル、さつきから森を回っているが、このままだと無駄に歩いているだけだと思うぞ？」

エルザが相変わらず剣を片手に持ったまま、話かけてきた。

「確かに」

と、俺も言つて。足を止めた。

「罨でも仕掛けるか？……いや、こんだけ広い森だと同じことだな……」

んーむ。と、俺たちは考え込んでしまった。

エルザの魔法は戦闘のときは頼りになるが、諜報活動や情報収集には向かない。

俺の魔法も、戦闘時や治療を行うときは便利でも、こういった状況のときは翼でも生やして、広い距離を見回すと言う使い方くらいしかない。

歩きまわって魔獣を探し続けてもいいのだが、効率というものだつてある。何かの作戦でも立てたほうがいいだろう。

「ルー、何かないか？」

「そーだな」

と、一瞬眼をつむったルーだったが、何かに気づいたように片目を開けた。

「ゼル、お前、糸みたいに細い光線とか作れるか？それから作れるんなら、何本くらい作れる？」

「ああ、できるぞ……。量で言えば、この森くらいは覆えるぞ

「

と、俺も言いかけて気づいた。そういうことか……。エルザも俺たちの会話を聞いて、何をするのかわかったようだ。

「じゃあ、さっそくやってくれよ。森を糸で覆えば、一本くらいには魔獣がひっかかるだろ」

「わかった。

アージエントファイラー」

俺が呟くと、俺の背中からだろうが銀色の糸が何本も何本も出てきた。一本一本は触れれば切れてしまふかと思われるほど細いが、ちゃんとした強度を誇っていた。そしてそれらは、きらきらと光を纏いながら、森の中に消えていった。

「相変わらず、ゼルの魔法は便利だな」

エルザが言うが、俺は感覚を糸の一つ一つに集中させているので、返事ができない。

「金銀二色の滅竜魔法なんて、妙な魔法だと俺は思うんだけどね」

「しかし便利なことは便利だな」

ルーの言っていることは少々気に食わない気もする。まあ、いいが。

おっと、今はそれより一本一本の糸に集中だ。

それから数分後。

「反応があつたぞ!!」

俺は閉じていた眼を開け、エルザに言う。

「そうか!!どのあたりだ?」

「だいたい、ここから

」

うー、口で言いにくいな。森の中の道筋と言うのは。なら、糸を魔獣に結んでつと。よし!これでいい。感覚のみでやったから、どこに結びついたかはわからんが大丈夫だろ。

「おい！ゼル！どのあたりなんだ？」

俺がなかなか返事をしないので、エルザが話しかけていた。

「ちょっと待ってくれ。今、魔獣に糸を結んだから、こっちに引きずり出す。

お前はちよつと、木の上にも登って、魔獣が出てきたら一撃を加えてくれ」

ちよつと荒っぽいかもしれないが、一撃を加えられるし、すぐ魔獣を連れてくることができるから、一石二鳥だろ。

「ふむ……。タイミングを合わせればできそうだな」

呆れ顔のルーとは対照的にエルザは、眼がきらきらしている。楽しんでるような……。。

でも、これが手っ取り早いことは間違いない。

「それじゃ、行くぞ！」

エルザは木の上に飛び上がった。一瞬で換装を行い、武器を剣から斧に変えた。

「……。ちよつと、コワイ。……。それは置いておいて。」

「――！」

腕に力を入れる。

「――！」

足を後ろに下げる。

「三！！！」

直後、重い手ごたえと共に、何か巨大な物体がこっちに向かって引き寄せられてきた。

（デカイ！！！！）

引き寄せられたのは確かに魔獣だった。が、それは俺が思っていたよりもはるかに巨大だったのだ。それこそ、なんでこんな大きな魔獣に今まで気づかなかったのだろう、と思えるくらいには。真っ赤な毛に全身を覆い、額には二本の巨大な角が生えている獅子のような魔獣だ。

しかも、

（え〜！ちょっと待ってくださいよ！このままだと俺が魔獣につぶされるんですが〜！！）

コントロールをミスって、自分のほうに魔獣をひきよせていた。しかも、糸の強度が無駄に高いので作った本人の俺も、一瞬では切断できない！！

（ヤバッ！！）

糸から手を離し、空に回避。そして地上では

「ドゥッ……！！！」

と、ド派手な音がしていた。エルザが斧を一閃し、魔獣の角を切り落としたようだ。

空中の俺は、両手に魔力を集め、急降下した。

「銀竜の………鉄拳!!」

魔獣の額に決まった。魔獣は苦しんだような声をあげる。そして口から、炎の玉を吐き出してきた。

（ナツみたいなやつだな!!）

エルザは今度は斧を槍に変え、それを一気に投擲した。弧を描いたそれは、魔獣の額に突き刺さる。今度は、魔獣は口から炎の息吹<sup>ブレス</sup>を無茶苦茶に噴き出し始めた。

「げ!!」  
エルザ!!ちょっと、離れてくれ!!」

俺はそういいながら、さっきのエージェントフィーラーをまた出現させ、魔獣の四肢を地面につなぎとめる。

魔獣はまだ暴れるが、糸はそう簡単には切れないし、切れさせない。魔獣の動きが、一瞬、止まる。

「エルザ!!行け!!」

と、俺が叫ぶと再び槍を剣に変えたエルザは魔獣に切りかかった。

十数分後・・・・・・・・。

「ちょっと、やりすぎたかな？」

「また、お前は無茶なことを・・・・・・・・」

「そう言うなよ。魔獣は倒せたんだからさ」

結局魔獣は、エルザが剣で一撃を加えたら、あっけなく断末魔と共に絶命した。散々、ブレスを吹きまくったので周りがかなりすごいことになっているのだが、まあ大丈夫だろう。

それから俺が魔獣を引きずり出した後も、木々が倒れまくって森のど真ん中に道を作っているのだがこれも大丈夫だろう。（多分）

「とりあえず、倒した証拠にさっきの角でも持っていくか？」

「ああ、そうだな」

エルザはさっき自分が切り落とした角をあつさりと肩に担いだ。  
・  
・  
・  
自分よりずっと大きな角を、だ。すごいな、妖精女王<sup>ティタニア</sup>は。

それからさらに数時間後……。駅にて。

「あー、家賃と食費、助かったー!!!」

「おー！これで、また奢ってくれよー！」

フザケたことを言った灰ネコは無視して、俺は喜びの声を上げてい

た。

その後、持ち帰った角で魔獣討伐は認められ、魔獣の亡骸の場所も教えた俺たちは報酬を受け取って、村を後にした。報酬はエルザと半分にした。それからエルザの切り落とした角は、村の人たちが飾りを施してくれた。エルザは気に入ったようで、フェアリーテイルに持って帰るそうだ。

それにしても……マジで助かったー！！エルザには笑われたが、こっちは必死だったんだ！！うちの家主は怖いからな……。家賃を滞納すると。

「ゼル、わたしは魔道士酒場によって帰るつもりだが、お前はどっする？」

「俺はすぐ帰るよ！家賃、三日送れてんだ！これ以上遅れると、大変なんだ！！！」

ほんとーに大変なんだ。

「そうか……。ではまたな」

と言って、エルザは列車に乗ろうとしたが、最後に振り返った。

「ああ、そうそう。ナツとグレイはもしかするとケンカをしているかもしれないから、もしそうなら止めておいてくれ。私は仲の良いあいつらを見るほうが好きだからな」

そう言って、エルザは汽車に乗り込んでいった。………装飾された角を担いだまま。

残ったルーと俺は呟いてしまった。

「あの角、どこに飾るんだろ？」

## 7話

### 「エルザ」(後書き)

エルザがあんまししゃべってない……。

すみません。エルザファンの方。

三人称SIDEにしないと、なんかセリフのバランスって難しいですね。

それから、この場を借りて唐突ですが、主人公の服装を、紹介したいと思います。書いてるうちに主人公の服装を考えてしまつて……。

ゼルは、深緑色の長ズボンに、白色のシャツを着て、フード付きの灰色のパーカーを羽織っています。(基本的に)後、黒い長いコートまたはマントを常にかけています。

お気に入り小説登録18件、ありがとうございました!!

## 8話

### ハチーム♡（前書き）

最近、スランプ気味かもしれません……。

それから、この場を借りて一つこれを読んでくださっている方に質問したいのですが……。

ユニークアクセスってなんですか？それからPVと言つのもなんですか？

馬鹿な質問でしたら、申し訳ございません！！石投げないでください！！！！

誰か、わたしの質問に答えていただけませんか？お願いします！！！！

8話どうぞ！！

## 8話      ハチーム

三人称SIDE

フェアリーテイルにて。

「ミラちゃん。こっちビール三つお願い」

「ハイハイ」

魔道士ギルド・フェアリーテイルでは、平和な空気が流れていた。カウンターでは思い思いの姿勢で誰かがだらけていたり、看板娘のミラが飲み物を給仕したりしていた。そんなギルドの片隅で、平和な雰囲気にもまれたようにボーツとしている少年魔道士が一人いた。頭の上には、魚の干物にかじりついている灰色の羽が生えたネコがいる。

「助かった。これで野宿はまぬがれた」

黒と銀の髪を手でグシャグシャとかきながら幸せそうにそう言った。その言葉に近くテーブルに突っ伏していたサクラ色の髪がツンツンに立った同じ年くらいの少年が反応した。

「ゼル」。またメシ奢ってくれねえか？」

ゼルと呼ばれた黒銀の髪の少年は、さっきとは打って変わったギラギラとした視線を送り、

「ナツ！今の言葉は取り消せ！！」

と言った。

ナツと言われたサクラ色の髪の少年も、その言葉に反応する。

「何でだよ。家賃が助かったんなら、食費も大丈夫なんだろう？」

ナツの隣で生魚をかじっていた青色の羽の生えたネコ　ハツピ  
も口を尖らせる。

「ル、ゼルはオイラたちにまたご飯を奢ってくれないの？」

「薄情だな！ゼル！！」

と、灰色のネコ　ルー　は食べかけの魚の干物で、ゼルの頭をペシペシとたたいた。

ゼルは背中から糸のような細い光線を出して、その干物をからめとった。

「あ！！俺の！！」

「こら、ルー！！食費はまだ節約の対称だと言っただろ！！」

ルーから取り上げた干物を、ゼルは糸の先につけてブンブン振り回す。

ナツはその糸を見て、眼をきらきらさせた。奢るのを断られたことは、忘れたようだ。

「お！ゼル！新しい魔法か！？」

「昨日、エルザと行った魔獣討伐クエストのときにな。魔獣、捕まえんのに使ったんだよ。いや、便利だぞ。この魔法は」

ゼルが何気なく言った一言でナツだけでなく、近くにいた何故か上半身が裸の少年魔道士　グレイ　までが、ビクツと体を震わせた。

「お前、よくエルザと行けるよな」

と、グレイも近くによって話しかけてきた。

「？なんか、問題でもあるのか？」

ゼルはわけがわからん、と言う風に首を傾けた。その頭上ではようやく魚を取り戻したルーが、魚をほおばっていた。

「ヘッ！エルザが恐いのか？氷野朗？」

ナツは今度はグレイを挑発しだした。グレイも、それに乗ってケンを始める。

ゼルは呆れ顔になって、その場を離れた。普段なら、ゼルはケンカをとめるところなのだが今日は、リクエストボードのほうに行った。

### 三人称SIDE OUT

### ゼルSIDE

「んー。やっぱり、またクエストを選ばないといけないのか」

「俺はもう干物しか食っていないから、早くクエストを選べ」

昨日に引き続き、俺とルーはまたリクエストボードの前で頭を抱えていた。今度は、食費を稼がないといけない。．．．．．悲しいな。

「く呪われた杖の魔法解除く、く魔法の腕輪を取ってくるく、色々あるのね．．．．」

と、ここで、昨日の俺とほとんど同じようなことを言っているルーシイがやってきた。  
こいつも家賃でも足りないのだろうか？

「あら、ゼルにルーシイ。二人とも依頼を決めたら私に言ってね。今日は、マスター定例会でいないから」

ミラがやってきてそう教えてくれた。そう言えば、今日はその日だったな

「定例会？」

ルーシイは知らなかったのか．．．．．まあギルド同士のつながりに関しては、あんまり表ざたにはされないから当たり前と言えそうなんだが。

「定例会っていうのはな．．．．．んー、なんて言えばいいか．．．．各ギルドのマスターたちが集まって定期報告をする会のことなんだ。魔道士を束ねる機関の評議会とは違ってな．．．．．」

ややこしいな。この辺りの説明は……。

俺が考えていると、ミラが光ペン（空中に文字がかけられる魔法アイテム）で、空中にサラサラッと図を描いた。

そして、一番上のところを指差し、

「え〜とね、魔法界で一番えらいのは政府とのつながりもある10人なの。……魔法界における全ての秩序を守るために存在しているわ。それが評議員よ」

さすがミラ！！すつごくわかりやすい説明だ！！

「ちなみに罪を犯した魔道士を裁くのもそこだな」

俺も口を挟んだ。

「そして、その下にいるのがギルドマスター。評議会での決定事項なんかを通達したり、各地方のギルド同士の意味伝達を円滑にしたり、私達をまとめたりするの……。まあ、大変な仕事ね」

「へえ〜」

うんうん。俺も改めて聞いたが、マスターはやっぱすごいな……。

「それでね。ギルド同士の連携は大切なもの。これをおろそかにしたら  
「

したら……。どうなるんだっけ？

「黒い奴らが来るぞ〜」

ナツがルーシイの後ろから、微妙に恐い声でそう言った。

「ああ、そうだった。闇ギルドだ!!」

「闇ギルド?」

ナツに「ヒイイ!!」とビビッていたルーシイだが、闇ギルドと聞いて俺の方に尋ねてきた。

「ギルド連盟に属していないギルドのことだよ。暗殺とかを引き受けたり……。まあ、とにかく法律を無視した依頼を受けてる奴らのことだな」

「前にゼルが倒したとか言ってたあれのことだよ」

ハッピーが魚をかじりながらそういった。

「な〜んか、あいつら正規ギルドに恨みでもあんのかな? 前のときも訳わかんないことばっか抜かして、勝手に人に魔法ぶつけまくるから、本拠地ごと吹っ飛ばしたんだが」

「ええええええ、ゼルって何したの!？」

ルーシイ、そこまで驚かなくても……。ナツとグレイも笑うなよ。。。。。

ん? そう言えば、俺エルザに何か伝言を頼まれてなかったか? ナツとグレイに対して。。。。。

あー、くそ。なんだったっけなあ。覚えてるはずなのに。。。。。

忘れたらアイツ怒るだろうな……。んーむ。

「ボタンッ！！！！」

ロキ？慌ててどうしたんだ？

エルザからの伝言を思い出すことはひとまず置いておき、俺はギルドーの女たらしの魔道士が慌てて入ってきたほうに注意を向けた。  
(ロキはいい奴なんだがなあ……。ちよつとなあ……。)

「大変だあーーーー！！！」

それはお前の顔色を見ればわかるが何があつたんだ？

「エルザが帰ってきたーーーー！！！」

……。は？それだけか？エルザになら俺は昨日会ったばかりだぞ？

……。あ！！伝言！！思い出した！！

俺はナツとグレイに後ろから話しかけた。

「ナツとグレイ!!」

「アイ!!」

「俺たちは仲良くやってる」

二人とも、いきなりハッピーの真似なんかしてどうしたんだ？

「エルザからの伝言を思い出したから、伝えるぞ。“ケンカするな”だ。……悪い、今思い出しまった。伝えたぞ？」

「……………」

おい！二人とも！。いきなり固まってどうしたんですかー？他のみんなも、エルザの名前を聞いて固まっているし。一体、どうしたっていうんだろう？

そのとき。

コツ、コツ、コツ、コツ。…………ドンッ!!

俺があたりを見回している間にエルザが入ってきたようだ。昨日見たばかりの角を床に置いた。

「おかえり、エルザ。結局、それ持ち帰ったんだ」

「ああ、きれいだからな。……………ミラ!!マスターはおられるか？」

「マスターなら、定例会よ」

「そうか……。なら報告はまたにしておこう……。」

それよりも……。、とエルザは急にあたりを見回し、

「お前たち！！！」

と、怒りの顔で叫んだ。うわ、あれ、慣れないと怖いんだよね。

「旅の途中でうわさを聞いた！！フェアリーテイルがまた問題ばかり起こしているそうだな！！」

「エルザ。問題ばかりじゃないぞ」

ちゃんと仕事だって片付けているぞ。それにお前もたくさん問題を起こしているだろ？まあ俺も、もう少し手加減なりなんなりを覚えなないといけないのだが……。

「ゼル！！お前は少々手加減というものを覚えろ！！湖を吹き飛ばしたと言うのはお前だろう！」

「わかってるよ。ていうか、なんで昨日会ったときに言わないのさ？」

「魔道士酒場で聞いたのだ！！……そして、皆も聞け！！マスターが許しても私は許さんぞ！」

さらにエルザは言葉を続け、

「カナ！なんとと言う格好で飲んでいる！！」

と、酒ダルから直接、酒を飲んでいたカナに怒り、

「ビスタ、踊りなら外でやれ」

と、踊りのポーズのまま固まっていたビスタに言い、

「ワカバ、吸い殻が落ちているぞ」

と、パイプを吸っていたワカバに風紀委員のように注意をし、

「ナブ！！相変わらずリクエストボードの前をうろろしているだけか？・・・仕事をしろ！」

と、リクエストボードの前で立っていたナブに叫び、

「マカオー!!」

とびくびくしていたマカオにも何か言っかと思いきや、

「ハアッ  
」

と、溜息をついた。なんか言ってやったほうがいいと思うんだが・・・。

そして最後には

「全く、世話がやけるな・・・。今日のところは何も言わずに置いてやろう」

などといって、額に手を当てて首を振った。イヤイヤイヤ、ずいぶ

んたくさん言っただしょーが。

「ゼル……。あの人がエルザさん？」

ミラの隣であっけにとられていたルーシィが俺に聞いてきた。もしかしてフェアリーテイル最強の女魔道士とミラに聞いて、もっと大女でも想像していたのだろうか？

「ああ、そうだよ。フェアリーテイル最強の女魔道士、妖精女王さ」  
テイタリーニア

「なんか想像してたのと違う……。それにしてもきれいな人。……」

「……。ルーシィはやっぱりそう思っていたのか。そう思っていると、エルザが俺に聞いてきた。」

「ナツとグレイはいるか？」

「あっちだよ」

指差したほうに俺も顔を向けると、ナツとグレイが肩を組んでいた。そう言えばエルザがいるとこの二人はケンカをしないな。普通でも仲は良いが、やっぱりケンカをしていないほうがいいからな。

「や……。やあエルザ。俺たち……。今日も仲良くやってるぜい」

「アイ」

しかし、なんだってハッピーの物まねを始めるんだろ？ルーシィ

も「ナツがハッピーみたいになった!!」と、驚いている。

「そうか、親友ならたまにはけんかもするだろが……しかし私はそうやって仲良くしているところのほうが好きだぞ?」

「いや、親友つてわけじゃ……」

「アイ」

まだ肩を組んだままのナツとグレイ。もうハッピーの物まねはいんだが……。

「こんなナツ……。見たこと無い……」

と、ルーシイは驚いている。エルザが来るたびにナツがハッピーになるようになったのは、何が原因だったわけ? 隣のルーシイに、

「ナツは昔ケンカをいどんで、エルザにボコボコにされたの」

と、ミラが光ペンで再び図を描いてくれた。

「あのナツが!?!」

「グレイは裸で歩いているところを見つかつて、ボコボコに」

「ロキはエルザを口説こうとして、半殺しに」

全員無茶苦茶だな。俺は手合わせをしたくらいだけど。

「ナツ、グレイ、ゼル」

ルーシィの反応を見ていたら、エルザがそう言った。

「頼みたいことがある。」

仕事先でやかいい話を耳にした。

本来ならマスターの判断を仰ぐところだが、早期解決が望ましいと私は判断した。……三人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな？」

「ああ、いいけど。頼みたいことって何だ？」

みんなはざわざわとしているが、それより俺は頼みたいということのほう気になる。

「それについては、明日、出発するとき列車の中で話す。準備をしておけ」

そう言って、エルザは出て行った。

その後で、ミラが

「ナツに 그레이 にエルザにゼル．．．。今まで考えたことなかったけど、これってフェアリーテイル最強のチームかも．．．．．」

と、呟いていた．．．．．俺はそうは思わないんだかな？

## 8話

### ハチーム♡（後書き）

次回は呪歌編です。

ゼルのキャラが最初と崩れているような気がしてきました・・・。

感想を下さるとうれしいです。ていうか、一言でもいいのでいただきたいです。

ありがとうございました！！

## 9 話

ハアイゼンヴァルト (前書き)

短いです・・・。

## 9 話

### 「アイゼンヴァルト」

「マゲノリア駅にて」

「しかしなんだろうな？エルザの頼みごとってのは？」

「よくわからないが、この三人を誘うと言うことはかなりヤバイんじゃないのか？」

「うー、やっぱりあたし来なかったらよかったかも……」

俺、ルー、ルーシイの順に三者三様の意見を述べていた。エルザから駅で待つようにと言われて俺たちは駅に来たわけなんだが、エルザはまだ来ていない。多分あの荷物の荷造りにでも、手間取っているのだろう。

ナツとグレイは今は訳のわからないことでケンカしている。……うるさいし、ケンカはダメだから後で適当にとめておこう。

ナツはともかくとしてもグレイは俺より年上だろ？大丈夫なのだろうか？いろんな意味で……。

って、あれ？よく考えたら何でルーシイがいるんだ？

「待たせたな」

「あー、そんなに待ってないぞー」

「すごい荷物!!」

今度はエルザ、俺、ルーシイの順の発言だったりする。ルーシイ、エルザの荷物は今日は少ないくらいなんだぞ…………。

「ん？君は確か、昨日ギルドにいた…………」

「新人のルーシイです!!ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくお願いします!」

ああ、ミラに頼まれたのか。ルーシイの星霊はちょっと見てみたいから、ちょうどいいな。

「私はエルザだ。よろしくな。そうか、ギルドの皆が騒いでいた新人とは君のことか…………力になってくれるならありがたい…………」

「こ、こちらこそよろしく…………」

と、ルーシイが言ったとたん、

「おい！エルザ！つきあってもいいが条件がある!!」

……ナツの声が割り込んできた。てか、エルザに条件とかよくいえるなあ。

「何だ？言ってみろ」

「帰ってきたらオレと勝負しろ!!…………前にやりあったときと

は違う！！今の俺なら・・・お前に勝てる！！」

自信満々といったナツ。拳を握り締め、やる気満々のようだ。

「お、おい！早まるな！！死ぬ気か！？」

グレイ、それは俺も少し賛成だ。

「フツ……。確かにお前は成長した……。私はいささか自信がないが……。良いだろう、受けて立つ」

エルザもよく言うなあ。

それからナツ！お前、まだ俺と手合わせしても勝ったことねえじゃんか！

でも、エルザとナツが勝負したら、どっちが勝っても負けてもいい結果になるだろうな……。

「おい、ゼル！！お前も帰ってきたら勝負だ！！最初のときみたいにはいかなえからな！！」

あれ？何で俺も！？てか、最初の勝負っていつのことだろうか？  
まあ、いいか。俺も久々だしな……。

「よし！！俺もやってやる！！」

「うおー！！燃えてきたー！！」

天井に向けて火を吹くナツ。　　こら、駅が燃えるぞ。落ち着け。

「バコン」

「ウギヤッ!!」

「……その後、ナツは俺が殴ったせいで汽車に乗せたときも  
気絶したままだった。  
ちよつと、力加減でも間違えてしまったのだろう。」

汽車にて………。

ちなみに向かい合わせの席に、ナツ

俺

ルーシィ

エルザ

グレイ

ハッピーノルー

と、座っている。

「うえ・・・・・・・・」

「まったく、情けねえな。ケンカ売った直後にこれかよ……………」

「毎度のことだけどつらそうね……………」

順番にナツ、グレイ、ルーシイの発言だ。汽車に乗ったとたん、ナツは……………まあいつものごとくの乗り物酔いだ。しょうがないな……………。

「ナツ、ちょっと来い」

「ナツ、私の隣に来い」

……………俺とエルザの発言がまたしても被ってしまった。  
……………まあ、それは置いておいて。  
フラフラのナツは俺とエルザの間に座り込んだ。

「ラクにしている」

「ラクにしる」

「アイ」

「ドゥッ」

「ゴンッ」

俺が首を、エルザがナツの腹を殴った。

「ギャッ」

ふー、これでナツもラクだろう。あれ？ルーシーはなんで微妙な顔をしているんだろう？でもまあ、そんなことはいいか……。

それよりも……。

「エルザ、そろそろ教えてくれてもいいだろ。俺たちは何をすればいいんだ？」

ナイスタイミングで俺の言いたいことを言ってくれたな、 그레이。

「……私達の相手は闇ギルド、アイゼンヴァルド。ララバイという魔法で何かしでかすつもりらしい……。」

（ララバイ？子守唄か？何だそれは？……あれ？よく考えると“私達の相手”っていうことは、なにかヤバいものだろうか）

「ララバイ、子守唄って意味よね……。」

「オイラも聞いたこと無いよ……。」

ハッピーもルーシーも知らないのか……。

「……順を追って話そう。この間の仕事を終えて、帰る途中のことだ……。」

「ということは俺と別れた後のことか？」

「そうだ。私はオニバスの町の魔道士が集まる酒場によった」

その後のエルザの話をもとめると、こうなった。

オニバスの町の酒場で、ララバイの封印が解けないと騒いでいる何人かの魔道士を見つけた。そのうちの一人が、ララバイの封印の解き方を思いついたようで一人、去っていった。

そしてそのとき一人が漏らした名前が……

「エリゴール……か」

（闇ギルドアイゼンヴァルトに……そのエースである暗殺者、死神エリゴール……。しかも封印されるほどの強力な魔法……。ララバイ。こりゃ、大変そうだな）

「不覚だった……。あの時、エリゴールの名に気づいていれば、全員血祭りにしてなにをする気が白状させたものを……」

「俺も一緒に行つときゃよかったな……」

「なるほど……。アイゼンヴァルトが、封印されるほどの魔法で何かしようとしている……。どうせ ロクでもないことだから止めたいと……」

うん。グレイの言うとおり、多分要点をまとめるとそうなるな。

しかし、マスターのいないときに何だっ

んな大事になるのだろうか……。

この後、俺は一瞬ここで気づけたことを深く考えなければいけないことになる……。

しかしそれはしばらく先のことだった。

## 9 話

### ハアイゼンヴァルト (後書き)

最後変だし、つなぎの話なので短いです!!  
すみません!!

## お知らせ

こんにちは、こんばんは、おはようございます。

突然ですが、更新のペースが遅くなってしまう事態になりました。

学業も始まり、今までのペースではとうてい投稿できません。

基本的には周一で投稿と書いていましたが、別の作品との兼ね合いも含め、更新が停滞気味になるだろうと思われるのです。

なので先にこの場で、ご報告しておこうと思いました。

しかし更新は多少停滞気味にはなりますが、ちゃんと話は進めていくつもりです。ご心配なく!!

これからもよろしくお願いします。

11話

ハラルバイ（前書き）

うー、難しい。

## 11話

### ハラバイ

「ところで、……エルザさんはどんな魔法を使うんですか？わたし、まだナツとゼルの魔法しか見たことが無くって……」

「わたしの名前はエルザでいい。そうだな……どんな魔法といわれてもな……」

「エルザの魔法はきれいだよ！血がいつぱい出るんだ！相手の……」

ハッピーそれはきれいって言うのとは意味が少し違うだろ……。魚をかじりながら笑顔で言うなよ……。

「私は 그레이 の魔法のほうがきれいだと思うぞ？」

確かに、 그레이 の魔法はきれいだな。

「そうか？」

그레이 が手を合わせるとそこに冷氣が収束していく。手を開けば、そこにはフェアリーテイルのマークが氷で形作られていた。氷の造形魔法か……。夏には便利なんだよな……。

ルーシーも 그레이 の魔法には興味をそそられたみたいだ。「きれい」とか言っていた。

そして最後に一言、

「あんたたち、氷と炎だから仲悪いのね。ナツ炎で 그레이 が氷だから……」

と、言っていた。それはそうかもな。

「オニバス駅」

「エルザ、アイゼンヴァルトの奴らはほんとにまだこの町にいるのか？」

「わからない……。それをこれから調べる……。」

「雲をつかむような話ね……。」

まあ、そういうなよ。ルーシィ。

それにここで言うべきかはわからないが。俺はアイゼンヴァルトもエリゴールも一度、戦ったことがある。何年か前に人にバカスカと魔法をぶつけるから、ギルド全員とギルドの建物ごと吹っ飛ばしたことがある。

まあ、エリゴールの風の魔法はそこそだったが、ナツやエルザやグレイの敵ではないだろう。ルーシィは……。アクエリアスとか言う最強の星霊がいるらしいから、そいつなら大丈夫だろう。

そう言えば……。何か忘れているような。。

「オイお前ら!!」

ルー？どうしたんだ？一体？

「ナツは・・・・・・・・どうした？」

あっ！！！！

汽車の中だ！！って汽車は！？

「シュポーーーーー」

そのときには汽車はすでに煙を噴き上げて、出発していくところだった。

「話に夢中で忘れていた・・・・・・・・」

「なんとということだ！！アイツは乗り物に弱いのに！！私の過失だ！！とりあえず私を殴ってくれ！！」

「いや、無茶言つな。お前の鎧なんか殴ったら痛いわ！！」

痛いのは事実だ。・・・・・・・・しかし今はそんなことを言っているときではないので、とりあえず近くの駅員に事情を説明する。

「あの、ですから仲間が一人、列車に乗ったままなのでちょっと列車を止めてもらえませんか？」

「仲間のためだ。止めてくれるだろう」

俺とエルザで頼むが駅員はなかなか承知してくれない。なぜだろう？ルーシィに聞いてみれば、

「フェアリーテイルの人ってみんなこんななのね……」

と、遠い眼をされた。よくわからん。

そうこうしているうちにエルザが緊急停車のレバーを見つけ、それを引いた。

列車はもうすでに俺たちの視界からは消えていたのでわからないが、おそらくどこかで止まっているのだろう。

「おい！エルザ、ゼル、ルーシィ！乗れ！」

그레이の声に振り向くと、魔道四輪を持ってきていた。これはスピードは出るが運転手の魔力をくらって走る自動車だ。

さすが、 그레이は行動が早い。                      そう思いながら、俺たちは魔道四輪に乗り込んだ。

汽車と平行に走行中。……ちなみにハンドルはエルザが握っている。 그레이が屋根に張り付き、ルーシィが席に乗り、俺は羽で飛行中だ。

「ナツー!!」

「出てこーい!!」

「いや、それはムリでしょ!!」

俺が言ったとたんルーシーに突っ込まれた。前から思っていたのがこいつはツッコミ役だな。

「いや、前に船にナツを忘れたときに外から呼んだら窓から出てきたから、今度も出て来ると思っただが」

「ホントかしら……」

「絶対出てくる」

「

ハガシャーーーーン」

俺が言葉をつづける前に汽車の窓から、荷物を背負ったナツが飛び出てきた。

「ほらな」

「ホントに出てきた……」

飛び出たナツはそのままこっちに向かってくる。というか飛び出てきた格好のまま、こっちに突っ込んでくる。あれ……このままだと……

「ゴチーン!!」

俺が危険を察知して車から離れたとたんに、 그레이とナツの顔面が音を立ててぶつかり合った。

車を止め、ナツの話を聞いている。というかナツに謝っている。

「悪い、忘れていた」

「チックショー、ゼルはまた俺を忘れるのかよ!!」

「すまん。私も忘れていた」

「……………アイ」

なんで俺が言っていると怒ってエルザが言えば素直なんだよ!! ナツ!!

「ともかくも無事で何よりだ」

「無事なもんか!! 列車でなんか変な奴が出てきやがった上にそいつ、フェアリーテイルをバカにしやがったんだ!!」

「そいつ、どんな奴だ？」

人の家族をバカにしたんなら許せない奴だ。知っている奴なら後でぶっ飛ばしておこう。

「えーとな、あんまり特徴が無い奴だったな……。変な笛を持ってたな……。三つ目のドクロがついた骨みたいなのだった。それに確か……。アイゼンヴァルトとか名乗ってたぞ!!」

「バカモノ!!」

エルザがナツを張り飛ばした後、言葉を続ける。（張り飛ばされたナツはかなりの距離を吹っ飛ばされた）

「それは私たちが追っている相手だ！！何故みすみす見逃した！！」

エルザがナツをかくかくと揺さぶった。いや、いくらなんでもそれは言ってるのが無茶だろう。だって、ナツはエルザの話の間中、気絶していたんだから。まあ、やったのは俺とエルザだが……。

「そんな話初めて聞いたぞ？」

「さっき説明しただろう！！人の話はちゃんと聞け！！」

あちやく、エルザはこういう風に怒り出すとそれこそ人の話を聞かないんだよな。

「やっぱり無茶苦茶だな……」

「だよな……」

「それがエルザです！！」

「それがエルザだ」

ルーも最後のときだけハッピーと合わせたように元気に言うなよ……。今まで人の服のポケットで眠っていたくせに……。

「先ほどの列車に乗っていたのだな？すぐに追っぞ！！」

エルザはすでに車に乗り込みハンドルを握っている。行動が早いな。全員が乗り込みかけたとき、後ろで一人立ったままだったルーシィが口を開いた。

「ナツ……。そいつホントに三つ目のドクロの笛を持ってたの？」

「ああ？そうだぞ」

ルーシィはそれを聞いて黙り込む。一体、どうしたんだろう？

「あたし……その笛知ってる！！ララバイ……死の魔法！！」

死の魔法？……ララバイ？……あっ！！俺は、ざっと血の気が引いた気がした。

「ルーシィ、それ呪殺のことか！？」

「多分そう！！」

マズイ……。アイゼンヴァルトやエリゴールがそんなものを手に入れたら……。

「おい！ゼル、ルーシィ、どういうことだ？」

「エルザ、禁止されてる魔法で呪殺ってあるだろ？」

「ああ、その名の通り対象者に死を与える魔法だな」

そう、呪殺は危険すぎる魔法だ。そしてララバイはもっと危険なものだ。

「ララバイは聴いただけで対象者に『死』を与える呪いの魔法なの……！」

「つまりララバイは集団呪殺に使われる魔法アイテムなんだ……！」

俺とルーシィの言った言葉に、その場の空気が凍りついた。

## 11話

## ハラルバイヤ（後書き）

今回は書くのに手間取りました。

そしてこの駄文・・・・・・・・。

精進します・・・・・・・・。

## 12話

「オシバナ駅」(前書き)

つなぎの話なので、短いです。  
ご容赦を!!

## 12話

### 「オシバナ駅」

場所と時間は少々移り、ギルドマスターたちの定例会会場。クローバーの町

「マカロフちゅわ〜ん。アンタんとこの魔道士ちゃんは元気があつていいわあ〜」

いささか妙な声と格好でフェアリーテイルのマスター・マカロフに話しかけているのは青い（ブルー）ベガサス天馬マスター・ボブである。マスター・ボブの服に何故羽が生えているのかは本人しか知らないことであろう。そして名前から容易に想像できるが“男”である。

「聞いたわよ〜。どうかの権力者コテンパンにしちやっただってえ？」

「おお、新入りのルーシイじゃな？あいつはええぞお、モチモチッポヨヨ〜ンじゃー！！」

何がそうなのかは聞くべきではないだろう。

ワッハッハッと高笑いをするマカロフのところに

「おいおい、笑ってる場合かよ。マカロフ」

トゲのついた帽子を被った冷静な声が切り込んできた。声の主は正規ギルドの一つ、四つ（クワ）首の（ケル）番犬のマスター・ゴールドマインである。

「元気があるのはいいが、お前んところはやりすぎなんだよ。評議員の中にはいつかフェアリーテイルが町一つ潰すんじゃないかって心配している奴もいるらしいぞ」

「ニヨホッホッホ、潰されてみたいのお」

ひどいセクハラ発言のマカロフは放っておいてゴールドマインはさらに突っ込む。

「いや、ふざけるんじゃ無くてよ。お前のとこの混沌妖精カオスフェアリーのゼル・アイツ、去年に聖十魔道士になっただろ？」

アレで評議員の奴らがピリピリしてやがるぞ。フェアリーテイルに二人も聖十がいるのはよくねえってことらしいが……。それにあのガキ、やることが無茶苦茶だろ？」

これにはトボケ顔だったマカロフも真面目な顔になる。

「ふむ……。しかしそう言ってもな……。」「

思案顔になり黙り込むマカロフ達。

と、そこに青い鳥が割り込んできた。魔法の手紙を届ける魔法鳥で

ある。

「マスター・マカロフ、マスター・マカロフ。ミラジェーンさまからお手紙デス」

そう言って手紙をマカロフの前に落とす。黙り込んでいたマカロフはそれを開ける。魔方陣が展開され、ミラジェーンの映像が現れた。

「マスター、定例会ごころうさま。実はマスターがいない間に、とってもステキなことがあったのでお手紙しました」

他のギルドマスターに「ウチの看板娘じゃー！」と、ミラをアピールしていたマカロフだったが“とってもステキなこと”と聞いて注意を手紙に戻した。

笑顔のミラの言葉は続く。

「なんとー！あのエルザと 그레이 と ナツ と ゼル が チーム を 組んだんですー！私と思うにこれってフェアリーテイル最強チームじゃないかと思うんですよ 一応、ご報告しておこうと思ってお手紙しました。………それでは」

笑顔とともにそれだけを言っ、ミラの幻は消えていった。

そしてそのミラの“とってもステキなこと”の情報により、ダメージを受けた者が一人いた。

「ぬわななななな」

そう、マスター・マカロフである。

周りではゴールドマインやボブが

「心配が現実になりそうだなあ・・・オイ」

などと言っていたのだが、そんな声はマカロフの耳には届かず、マカロフは

（なんてことじゃ・・・。。奴らなら本当に町一つ、潰しかねん・・・。。定例会は今日終わるし、明日には帰れるが・・・。。それまで何事も起こらずにいてくれえっ！！頼むう！！！！）

と一人、心中で絶叫していた。

「クヌギ駅近辺」

「まさかアイゼンヴァルトの連中が列車を乗っ取るとはね・・・」

「馬車や船を乗っ取るのならまだわかるけど・・・」

「アイ、レールの上しか走れないからメリットあんまり無いよね」

「しかし、スピードはあるな」

俺とルーシイがララバイとは何かを説明した後、俺たちは魔道四輪を飛ばしていた。

そしてその途中で通りかかったクヌギ駅で、アイゼンヴァルトが列

車に乗っ取ったことを聞いたのだ。しかし、何故列車なんかに乗っ取ったんだろう？・・・・・・・・スピードは確かにあるが・・・・・・・・。

「何かの理由でアイゼンヴァルトの連中は急がざるを得ないんじゃないのか？」

グレイが言う。いいこと言っているとは思っのだが、半裸だと説得力がほとんど無いぞ・・・・・・・・。

「でも軍隊も動いているんだし、捕まるのも時間の問題じゃない？」

「だいいいんだがな」 「そうだいいが」

俺たちはとりあえず、その場を離れた。

しかし、さっきグレイの言った一言。“何かの理由”となると、何が思いつけるのだろう・・・・・・・・。

期間限定の何かでもあるというのか・・・・・・・・・・？

ゼルSIDEOUT

### 三人称SIDE

フェアリーテイル最強チームとミラに言われた者たちは、オシバナ駅に向かって魔道四輪を飛ばしていた。魔道四輪の隣を、羽を生やして飛んでいるゼルが、ハンドルを握るエルザに叫ぶ。

「おい、エルザ！飛ばしすぎだ！！俺と一回変われ！！」

魔道四輪はスピードは出るが運転手の魔力を消費する。先ほどから猛スピードで魔道四輪を飛ばしまくり、さらに長時間の運転を行っていたらいくらか妖精女王でも魔力が乏しくなるだろう。

「おい、エルザ！ゼルの言うとおりだぞ！一回、変われよ！！」

「そんな悠長なことをいつている場合ではない！！・・・集団呪殺魔法だ！？そんなモノをエリゴールが使用すれば！！」

「いざつてときにオマエの魔力が無くなっちゃったらどうすんだよ

「!?」

「そのときは棒切れでも持って戦うさ!!それにお前たちもいるしな!!」

エルザは不敵な笑みを浮かべている。こいつならホントにやりかねないな……、とゼルは小さく呟いた。

呟いたゼルのポケットから灰色のネコ、ルーが顔を出した。

「なあ、ゼル」

「ん?なんだ?」

ゼルはポケットに手を突っ込んで、ルーの首根っこをつかみ自分の視線の高さにまで持ち上げる。

「なんでアイゼンヴァルトの奴らは、駅なんかを占拠したんだろう?」

「駅には人がたくさんいるからじゃないのか?現に前には野次馬が見えてるしよ」

「いや、それだけじゃないんじゃないのか」

「んだよ。はつきりしねえな」

ゼルとルーの会話に魔道四輪の屋根に張り付いていたグレイが割り込んできた。

「いや、それだけなら駅なんかでなくとも」

ルーはさらに何事か考えていたが、結局そのまま押し黙ってしまった。グレイもゼルも黙り込む。そこにエルザの声が割り込んできた。

「見えてきたぞ！！オシバナ駅だ！！」

フェアリーテイルの一同は、なぜか黒煙をあげている駅に向かっていった。

「現在、脱線事故のため駅には入れません！！」

オシバナ駅の前の野次馬に、駅員がマイクを持って説明している。脱線事故のため、駅には入れない、の一点張りの説明だ。野次馬の中には事情を漏れ聞いたものが

「駅がやばい奴に占拠されたらしいぞ……………」

と、誰に言っても無く呟いていた。

そしてその騒ぎに突っ込みかけているフェアリーテイルの妖精女王・エルザ。駅員の一人の肩をつかみ、問いかける。

「君！！中の様子は！？」

が、駅員は事情が飲み込めず

「ん？なんだね？君は？」

と、無謀にも答えてしまった。次の瞬間、エルザの頭突きをくらいその駅員は昏倒する。

エルザはその近くの駅員にも同じことを問いかける。

「中の様子は？」

「ゴンッ」

即答しない駅員はエルザの頭突きを全員くらう羽目になった。

「即答できる人しかいないってことね？」

ボロ雑巾のようになってしまったナツを背負ったルーシイが言う。  
ナツは先ほどまでの汽車・魔道四輪と立て続けにスピードの出る乗り物に乗ったせいで、撃沈してしまったのだ。

グレイがナツを背負うわけも無く、ゼルはと言えばナツより背がだいぶ低いせいで背負うことができなかったのだ。結果、ルーシイが背負うことになった。

「エルザがどういう奴かわかってきただろう……」

グレイの一言は上半身がまたしても半裸であったため、説得力がまるで無かった。

駅員のほとんどを地面に沈めたエルザが言う。

「アイゼンバルドは中だ！行くぞ！」

「「おう！」「」

見事にそろったゼルとグレイの声とともにフェアリーテイルの魔道士たちは駅に入ってしまった。

## 12話

### 「オシバナ駅」(後書き)

誤字・脱字・文法上の誤りの指摘等々、おまちしております。

13話

ム力つく奴（前書き）

短いです！！区切りかたが変です！！

# 13話

## ム力つく奴

オシバナ駅の中をカツカツという靴音が響いていた。先頭を走っているエルザが言う。

「軍の一個小隊が突入したが、まだ戻っていないらしい。おそらくアイゼンヴァルトとの戦闘が行われているんだろう」

「一個小隊だけじゃ、闇ギルドにはきついんじゃないのか？」

エルザの後ろについて走っているゼルが問いかけた。

「軍の小隊でもやばいってどんだけなのよ」

いまだ反応がない状態のナツを背負ったまま、ルーシイが言う。

「普通の軍隊じゃ、物足りないと思うぜ？ 評議員直属の部隊とかなら話は別なだけだよ」

ゼルは首を回して、ルーシイの言葉に答える。

顔色が若干青くなっているように見えるルーシイは、眼の前に広がっている状況を見て、さらに顔色が悪くなった。

騎士団の一同が、鎧や折れた剣とともに構内のそこ、ここに倒れていれば驚くなと言うほうがムリだろうが。

「全滅してるよ！」

ハッピーも焦ったような声で叫ぶ。

「相手はギルド、丸ごと一つだ。それも全員が魔道士の闇ギルド……軍の小隊ではやはり話にならんか」

「小隊じゃあな……」

ゼルも呟いた。

そしてそれから魔道士たちは無言で足を速めたのだった。

ゼル  
SIDE  
CHANGE

足を速めてたどり着いた先は、アイゼンヴァルトの奴らが大量に集まっているところだった。あゝ、前のときに見たことある奴らばかりだなあ。

エリゴールの奴も趣味の悪そうなカマを抱えているし。俺がそんな風に考えていると

「やはり来たか、フェアリーテイルのハエども」

エリゴールがニヤついた顔でこっちを見ながらそんなことをのたまった。ム力つくな。他の奴らだってニヤニヤ笑ってやがるし。……俺にぶっ飛ばされたこと、もう忘れてやがんのかな？

「な、何？この数？」

ルーシイはかなりというか完全に顔面蒼白と言う感じだ。ん、まあギルド一つが集まったのならこんなものだろ。

「貴様！貴様がエリゴールか？」

エルザが窓の辺りに座っていたエリゴールに視線を向けていった。エリゴールは相変わらず答えずに、笑うばかり。

「エルザ、アイツで間違いないぞ」

俺はエルザにひそつと囁いた。

後ろではルーシイがナツを覚醒させようと奮闘中だが、ああなったナツはなかなか起きないんだよねあゝ。

と、そのときアイゼンヴァルトの奴らの前列にいた一人の魔道士が怒り顔で、言った。

「ハエがあ、お前らのせいで俺はエリゴールさんに」

ン？人の家をさっきからよくもハエ扱いしてくれやがるな、こいつらは！

「へえ？じゃあハエに負けたお前らは何だって言うのかな？」

エルザの前に出て、アイゼンヴァルトの奴らを睨みつけながら言う。

「げ、混沌妖精！」  
カオスフェアリー

「あんな奴がいるなんて聞いてませんよ！？エリゴールさん！！」

「・・・・・・・・・・チツ！！」

アイゼンヴァルトから帰ってくる反応は様々だった。

「おい！エリゴール！貴様、ララバイを使って何をするつもりだ？」

エリゴールを指差し、叫ぶ。

「わかんねえのかア？」

「だから聞いてんだよ！とつと教えろよ！」

・・・なんか今の発言、バカな奴みたいだ。反省反省。

俺の質問には答えず、エリゴールはふわりと浮き上がると駅に取り付けられているスピーカーの上而降り立った。風の魔法による飛行か・・・。

スピーカー？ まさか！？

「貴様！ララバイを放送するつもりか！？」

俺の言おうとしていたことをエルザが言った。  
高笑いとともエリゴールは言葉を続ける。

「この駅の周辺には、何千人と野次馬が集まってる。  
。音量上げれば町中に響くだろ。死のメロディーがな」

「何の罪もない人たちに、ララバイの笛の音を聞かせるつもりか！？」

「これは肅清なんだ・・・。権利を奪われた者たちの存在を知らずに権利をかけ、生活を保全しているおろかな者どもへのな」

うわ、何なんだコイツは。権利とかふざけんなよ。お前らが悪行ばっか重ねるからだろ。

「この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって、死神が罰を与えに来た！！」

「そんなことしたって、権利なんか戻ってこないのよ！！」

ルーシィも言う。

「ここまで来たら欲しいのは権利じゃねえ……。権力だ!!」

権力があれば全ての過去を流し、未来を支配することもできる!!」

自信満々といった様子のエリゴール。ムカつくぞ。マジで。もう一回、ぶっ飛ばしてやる。

足に魔力を集め、地面を蹴る。勢いのついた俺の体はエリゴールの眼前にまで跳ね上がった。そのまま、俺は回し蹴りを放つ。弧を描いた俺のけりは、エリゴールの顔に叩き込まれた。スピーカーから落下するエリゴール。

……。そういやララバイって誰が持ってたんだっけ？  
……。エリゴールか？  
まあいいか。

全員倒せばいいんだから!!

13話

ム力つく奴（後書き）

グレイとルーが空気だ……。

すみません。色々と。次回は軌道修正したものにしますから。

石投げないでください!!

## 14話

### 「狙い」(前書き)

ごめんなさい。

二ヶ月も開けていたなんて……。申し訳ございません。

低クオリティにはご容赦を……。。

後日、一部編集。

## 14話

## {狙い}

ゼルSIDE

俺が蹴り飛ばしたエリゴール。風の魔法を使うあいつがとった行動は、落下しながらも魔法で体勢を立て直すと言う、たいそう器用なものだった。

しかもそのまま窓を突き破って、飛んでしまった。・・・ララバイを持ったまま。

しかも逃げる際に妙にコツチを睨んでる雑魚を残していきやがった！！

しかも“闇ギルドの恐ろしさを思い知らせてやれ、”とか、挑発まがいの言葉つきで！！

「待て！！コラ！！」

俺は翼を展開させて後を追っかけようと飛び上がったが、下のアイゼンヴァルトに阻まれた。向こうは数頼みで魔法弾を打ってくるので、避けるのがちよつと面倒だ。

が、カンケー無い。

「邪魔だっつーの！！！！」

ドッカアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

床もろとも全員吹き飛ばしてやった。

「げ……」

「ゼル、やりすぎだ」

「悪い悪い、あ、でも俺はエリゴールを追っかけるからな」

それじゃ、と窓枠に足をかけて飛んだ。後ろではまだ何か言っているようだが、多分大丈夫だろう。

エルザSIDE

全くあいつは……。ほとんど全員を吹き飛ばしておいて……。

……後で、説教だな。

「おい、ナツ、グレイ」

「あ？」

いつも思っのだが、声がそろっということとはやっぱりこいつらは仲が良いのだな。

「お前たち二人で、ゼルを追いかける。あいつは強いがかなり無茶苦茶なのでな」

あいつの強さは認めるが……。ナツでもあそこまで戦った後をボロボロにはしない。

ん？何故すぐ動かずに、睨みあっている？

「聞いているのか！！」

「アイ！！」

よし、二人は行ったな。ふむ、私とルーシィは……。放送室に向かうか……。エリゴールがスピーカーを使用すると言っのなら、十中八九現れるだろう。

「ルーシィ！！放送室に向かうぞ！！走れ！！」

「わかったわ！！」

よし！！何としてもエリゴールを止めるぞ！！

私たちはそれぞれの方向に走り出した。

ゼルSIDE

「なあ、ゼル」

ポケットの中で今までずっと黙っていたルーがひょっこりと顔を覗かせた。えらい静かだったな、お前は。

現在、俺はエリゴールを追っかけて飛行中だ。俺が駅の窓から飛び出たときには、もうすでに姿がなかったのだ。・・・・・・逃げ足だけは速いやツ。

「アイゼンヴァルトなんだがな」

「ん？どうかしたのか？」

「何か狙いでもあるように思わないか？」

狙い？

「何かなあ……。何でこの駅を狙ったんだろう……。もし正規ギルドの俺たちに恨みがあるんなら、もっと目立つような駅を狙うんじゃないのか？」

「何にも考えてねえんじゃないのか？」

「オマエじゃあるまいし……………」

失礼なヤツだな！！

ブツブツ言いながら、駅周辺の地図を取り出すル！。別にどうでもいいがどこから出したんだ？それは。

「今いるのはここだろ……。そしてこの線を経由してきた……………。この駅の先には……………！！！！！！？？？？」

どうしたんだ？いきなり、顔色を変えて……。まあネコだから顔色まではわからないが。

「おい！！ゼル！！今すぐエルザたちに連絡を取れ！！」

ってどうしたんだ一体？

「今いるこの駅！！コレがどこへ線路を繋いでいるか考えてみる！！」

飛びながら俺の顔の前に地図を広げるルー。

必死なルーの声に、俺は今いる駅から延びる線路をたどった。

・・・そしてその先にある駅は・・・・・・そしてその町の名前は！！

「クローバー駅！？マスターたちが定例会を開いているところじゃねえか！！」

クローバー駅につながっている線路上にある駅は、これ一つっきり・・・ってことは・・・。

「エリゴールたちの狙いは・・・ラバイを使った大量殺人なんかじゃない！！」

「本当の狙いは・・・・・・ギルドマスター！？」

それに気づいた俺とルーはしばらく羽ばたきを止めた。

それから俺とルーが行ったことは魔水晶で、エルザたちに連絡を取

ることだった。

「おい！エルザ！！ナツ！！グレイ！！ルーシー！！」

「アイゼンヴァルトの本当の狙いってのがわかった！」

「 「 「何！？」  
「 「 「

全員同時に魔水晶を経由した会話をしているのでやや混乱しそうだが、便利なことには変わりはない。まあ、今はどうでもいいが。

「 アイゼンヴァルトの狙いはララバイをここで吹くことじゃない！！」

「 ???？」

ルーが俺の言葉に続いた。

「本当の狙いってのは、定例会中のギルドマスターだ！あいつらがこの駅を占拠したのは、クローバー駅への道を絶つためだ」

「確かか！？それは！」

「どーいうことだよ！！」

グレイとナツが同時に聞いてくる。

「ふむ・・・私とルーシーは放送室に向かったのだが、あいつらの誰とも出会わなかったことを考えると、狙いがここではないと言う

のは確かだな・・・」

「とにかく！俺はエリゴールを探す！まだここらにいるはずだし、あいつがララバイを持ってるはずだ！！」

それだけを言うと俺は会話を切った。そしてまた飛び続ける。駅の中を飛び続けると、ついに外へ出た。

「くそっ！どこだ？」

飛び出したところはちょうど駅の正面玄関だった。辺りを見回していると後ろから声がした。

「ほーう。混沌妖精、早い到着だな」

そこにいたのはカマを持ったまま空中に浮いているエリゴール。

「・・・・・・・・お前らの狙いはここじゃねえだろ？」

俺の言葉にエリゴールはピクリと顔を動かした。

「本当の目的ってのは、マスターたち・・・・・・・・。だろ？」

「！！・・・やっぱりお前は鋭すぎんだよ・・・。邪魔だな」

余計なお世話だ。大体、気づいたのは俺じゃなくてルーだし。ルーもポケットからひょこひょこ出てきた。

「ま、おまえとは一度まともに戦ってみたかったんだが・・・・今は仕方がない」

すつと手を上げるエリゴール。何をする気だ？

「悪いが、今はそんなことをしている暇はねえ！」

その瞬間、俺の周りに衝撃が走り、俺の体も後ろに吹き飛ばされた。

## 14話

### 「狙い」(後書き)

これからはまた週一くらいのペースを取り戻すように努力します・  
・。

えっ？努力せずに結果出せて？  
・・・・・がんばります。

15話

〔逃走・追跡〕（前書き）

うつ、春休みなのに連日春期講習行っていました・・・。

15話

〔逃走・追跡〕

ゼルSIDE

「イテテテテテ」

「あのヤロー！」

俺とルーは二人同時に悪態をついた。もっともルーのほうは俺に潰されかける形になったせいで漏れた悪態だった。

「おい、ゼル。これって……」

「ああ、俺もコレは見りゃわかる……」

「魔風壁だな……」

そう、エリゴールに後ろに吹き飛ばされて何が起きたのか、と真っ先に確認しようと、目を開ければ……。

目の前に吹きすさんでいる風の壁があっただよ……。  
外じゃエリゴールの高笑いだけが飛び退っていくところだし……。

ルーが怒鳴りながら魔水晶から魔法弾を打ったんだが、竜巻みたい

になっている魔風壁に弾かれて、効き目がない。

「おい！ゼル！」

俺が魔風壁を力任せに殴っていると、後ろからエルザたちが走ってきた。何故かぼろぼろになっている陰の薄そうなヤツを一人抱えている。

「こいつって確かアイゼンヴァルドの……ハゲヤマだっけ」

「ああ、そうだ。名前が違うがまあ、そうだ」

「コイツ、解呪魔道士だったんだよ！」

解呪……ああ、そういえばラバイの封印をといたのもこいつだって話だったな。

じゃ、魔風壁もコイツなら外せるんじゃない？

「あたしたちもそう思ったんだけど……」

「一人で逃げてた太っちょ魔道士にやられたんだよ……。ナツがコイツをぶっ飛ばしたあとにいきなりな……」

仲間を襲ったのか！？しかも話からすると動けない仲間に！？どんなギルドだよ！！闇とはいえ！！

「明らかにコイツは魔法を使えないな。解呪なんてもつての他だ」

ハゲヤマの傷を調べていたルーがそういう。今から俺が傷を治しても、俺の魔法じゃ魔力までは回復させられないな。

「しかし、そうなるとうずればいいんだ……」

「なあ、ゼル！！無理やり通れないのかよ！！」

「………ムリだな」

俺はさっき魔風壁を殴った手を見せる。素手で殴ったせいで結構出血してしまっている。一応、魔力は纏わせていたんだが連打しすぎて意味がなくなってしまった。

そのまま沈黙が辺りを包む。

俺にはこういうときに便利な“チカラ”があるんだが……。ここで使っているのか……。まかり間違えばとんでもないことになる……。しかし……。やらなかった場合は

考えたくもない。

仕方ない。使うしかないか。

「ちょっと                      全員離れてくれ」

俺はすつと魔風壁の前に立つ。

「ゼル！その力は！」

「おい！」

「え？何？」

後ろで三者三様の声がするが、聞こえない。エルザとルーは眼を瞑

ると、何も言わずに後ろに下がった。

俺に任すってことか？・・・ありがとな。

さて、やりますかね・・・。

俺はひとつ息をつくと、

ズブリ、と魔風壁に両手を突っ込んだ。

ル  
ー  
S  
I  
D  
E

チッ。あのバカ。やっぱりこのタイミングでチカラを使ったな。全く、制御が難しい、と此処二、三年は封印していたのに。全

「ち、ちよつとゼル、大丈夫なの？」

ルーシイがオレをつかんで聞いてきた。

正直に言えば大丈夫と言うか何と言うか……微妙だな。うん。しかしこの場合は現在のゼル“自体”に近づかないほうが良いだろう。

「ルーシイ、ゼルは大丈夫だ。……が、むしろオレたちのほうが危険だ」

「?????」

訳がわからない、というふうに首を傾げる。まあ、意味がわからんだろう。オレたちだって初めてのときはびっくりしたんだから。

「ルーシイ、説明するより見たほうが早い。見ていろ」

エルザが口を開いた。グレイやナツも視線を向けている。さて、大丈夫かね。コレは。

## ゼルSIDE

ぐっ！制御がキツイな……。コレは。

この魔風壁、魔力や術式的にはたいしたことないが、魔法の特性としてのこの暴風に集中が揺さぶられる。

が、それでもわかる。眼の前の魔風壁が大幅に収まってきていることは。

「ハッピー。なんか風が収まってきてない？」

「アイ。その通りだよ」

「ん？ルーシイは見るのって初めてだったけか？」

後ろで色々話しているようだ。あ。ルーシイには話したことなかったな。でも、ルーとかハッピーが話してくれるだろ。そんなことより今は魔風壁を消さないと。

「ああ、そういえばルーシイは知らなかったな」

「ゼルの……ハッピー、何て言うんだ？」

「特技だろ。アレは魔法じゃないし」

「アイ！ルーシイ、あれはね、ゼルのとくぎなんだよ！魔力とかなんとかを吸収できるんだ！だからそれで魔風壁を解除してるんだよ  
！！」

「魔力そのものの吸収！？反則じゃないのそれ！？」

「解除と言っても魔力をゴリ押しで減少させて、術そのモノを成り立たなくさせているだけなんだがな」

「……要するに無茶苦茶なことね」

「そう思ってくれて結構だ。ついでに言えば私たちの魔力もうつかりすると吸い取られかねんから気をつけろ」

「特技とか簡単に言ってくれるな。ったく。こっちはしんどいんだぞん。そろそろか？もう風も収まってきたし」

「おし！もう少し離れてくれよー！」

最後の仕上げと行きますかね。

「よっ！と」

掛け声は軽いが俺が魔風壁から手を引っこ抜くのと、魔風壁が掻き消えるのが、ほぼ同時だった。

反動で二、三メートル後ろに飛ばされたが関係ない。魔風壁は掻き

消えたんだから。ついでに両腕から大量出血だが包帯巻いておけば治るだろ。

今は魔力を大幅に消費する治癒魔法は使いたくないし。

「マジで消えるのね……」

「ウソだろ……。エリゴールさんの魔法が……」

「そんなことより行くぞ!!」

いつのまにやら復活していたハゲ(?)とかいうヤツも連れて俺たちはそのまま走り出した。グレイたち曰く、自分の前で死なれると目覚め悪いらしい。

「おい、ゼル。ナツはどうした?」

「ハッピーもいないぞ?」

「……………先に رفتんだろ。ハッピーは飛べるんだから。」

ゼルSIDE

「ムリムリ、ナツじゃ。 그레이に頼もう」

「ん、そだな」

「んだとコラアアアアアア！！！」

「あ、吹っ飛んだ。軽いねー」

「・・・・・・・・」

あれから                    とりあえずエルザたちは魔道四輪で向かい、  
俺とルーが先に羽を生やして飛んでいると                    （飛

行中に両腕に包帯だけは巻いたが、袖が消し飛んでいた……。)  
真っ向対決中のエリゴールとナツがいた。  
現状把握……。エリゴールが風の鎧を纏ったみたいになっている。  
ナツはそれをゴリ押しできていない。とりあえずハッピーの隣に降り立った。

「どうなってるんだ？これは」

「アイ。なんかエリゴールが風を纏っちゃって、ナツの攻撃が効かないんだよ」

「風と炎だろ、魔法の相性が悪いな」

「……。なあ、ゼル。ドラゴンスレイヤー滅竜魔道士って感情で魔法が変わるよな」

「あ？そうだけど」

ルーが何か黒い笑みを漏らした。

嫌な予感。

……。結果、冒頭の発言に立ち返る。

「ムリムリ、ナツじゃ。 그레이に頼もう」

「ん。そだね」

ハッピーまで連携してナツを焚きつけることないだろ。それで吹き飛ばされるエリゴールってどうなんだよ。

「あ、ララバイ何処行っただ？」

「知らねえ！そこら辺にあるだろ！」

何だよそれは。ま、線路に落ちてるけどさ。後ろからもエルザたちが来てるし大丈夫だろ。マスターたちも安心だ。

「じゃ、クローバーの町まで行ってマスターへの報告と、ララバイの封印のことを聞きに行くか」

「ああ、町までもうすぐだしな」

そうだなー。と俺が言おうとしたとたん・

ダンツと音がして、地面に落ちていたララバイが消え、

「ララバイはもらったあ！油断したなハエども！」

俺の後ろから魔道四輪が爆走してきて、そのルート上にいた俺は吹っ飛ばされた。運転席にいたのはあのハゲ(?)……………ララバイ握ってるし。

「 「あんの野郎

!!!!!!」 「」

地面に落ちた俺と、ナツとグレイの声が見事に三人そろった。

## 15話

### 〔逃走・追跡〕（後書き）

ララバイ編が思ってたより長いですー。  
え？作者のテンポが遅いだけってー？  
その通りですー。

・・・楽園の塔に早く行きたいなー。

## 16話

「ララバイ本体ご登場」(前書き)

しばらく間を空けていて申し訳ございませんでした。

## 16話

### 「ララバイ本体ご登場」

ゼルSIDE

つまり、結局ララバイの危険性は持ち越して、俺たちは魔道四輪も盗られたので必死で走ることになっている。

「って、クローバーの町が見えてきたぞ！」

「もうちょっとだよ……！」

先行しているルーとハッピーが知らせてきた。

「ホントか！なら急ぐぞ……！」

先を走るナツが更にスピードを上げる。早いな。

「なあ、ララバイってさ、もしかして意思を持っていたりするか？」

急に先を飛んでいるルーが俺の横まで降りてきて、そう言った。意思？魔法の道具が？ありえるのか？

「何だって？」

「あー、なんかな、ララバイの眼？みたいなヤツがあつたじゃんか」

「ああ、そういえばアレは三つ目のドクロがついていたな」

趣味悪いと思ったので覚えている。エルザも横に併走してきた。

「ルー、どういうことだ？それは」

「なんかさ、あの笛のドクロの眼が勝手にピカピカ光ってたように見えたんだよな。それが何かいやな感じがしたから、もしかしてな  
と思つて。ルーシイなんか知らないか？」

「んー、魔法具がねえ……。あたしもそんなことは、おとぎ話くらいでしか知らないわ」

でもな、ララバイ自体がおとぎ話クラスなモノだしなあ……。あり得るかもな。ま、どっちにしろ、ララバイを封印するかぶっ壊せばどっちにでもなるだろ。

「どっちでもいいだろ！とにかく急ぐぞー！」

グレイの叫びに俺たちは一層走る足を速めたのだった。

「あ、アレがそうなんじゃね？ほら、あそこの木の陰」

「んー、そのようだな」

クローバーの町についた俺たちはあっさりマスターと、その近くにいたカゲ（ハゲって名前じゃなかったらしい）を見つけ出した。定例会の会場近くで、雑誌を読み漁って楽しそうにするのはウチのマスターくらいだ。

「おい！ゼル！行かなくていいのかよ！！」

「・・・大丈夫なんじゃないのか？」

「そうよ。大丈夫よ」

うわっ！！マスター・ボブ！？いきなり横から出てこないでほしい！！

「あら、ゼルちゃん、ちょっと背が伸びたんじゃないの？」

「それでもチビだな。ナツより身長低いし」

うるさい、ルー。俺が一番年下っぽいからいーんだよ、別に。

「ね、ねえ。あっちのほうは大丈夫なの？」

ルーシイが聞いてくるが、マスターだぞ？大丈夫だろ。

「ルーシイ、よく見てみるよ。カゲは手が震えてる。あれじゃ吹けないし、多分マスターも吹かせないよ」

「うむ。マスターだからな」

「……俺たちはやっぱり“マスターだから”っていう一点で一番の信頼を置いているんだろうか、とふと思った。

しかしやっぱりカゲはマスターに何事か言われるとうつむいて、震えて、手からララバイを落としてしまった。

「よかったじゃないか」

「そんな笛、吹く必要ないもんな」

そっついながら、俺とルーは木の陰から出た。カゲは一瞬身構えたように見えたが、パタパタとルーが飛んでいってそっとララバイを手からとりあげたときは、あっさり従った。

それにどこことなく顔が笑っていたようにも見えた。

「マスター!!」

「スゲーぞ！！じっちゃん！！」

「うお！？お前たち！何故ここに！？」

俺とルーの横を次々とエルザたちが通り過ぎていった。って、おいおいエルザ。いくら感動したからって鎧にマスターの頭をぶっつけるのは無しだろ。痛いと思うぞ。

何かナツもマスターの頭をぺしぺし叩いてるし……。

「ゼル、これで……」

「ああ、一件落着  
」

かな……と俺が言おうとしたとたん突然、ララバイから煙が漏れ出した。

毒々しい紫の煙が、ルーの手の中のララバイのドクロの部分から大量に噴き出す。

「離れろ！！ルー！！」

「こ、今度はなに！？」

俺が手に魔法を纏わせて辺りを覆いかけている霧に突っ込むのと、ルーシイの声が後ろから聞こえるのはほぼ同時。

「どいつもこいつも……根性ねえ魔道士どもが！！」

さらにララバイから声が聞こえてきた。今まで、どんな人間からも聞いたことのないような声だ。頭の中にさっきルーが言っていた言

葉が聞こえてくる。

“ ララバイって意思を持っていたりするか？ ”

・・・それに俺はなんて答えた！？なんで考えなかったんだよ！  
！ちくしょう！！

「ルー！！ララバイから離れろ！！」

煙の中からは放電するような音も聞こえてくる。煙の中に手を突っ込むとピリピリとしびれるように感じる。何だこの魔力・・・キモチワルイ・・・。  
手探りの先に触りなれた毛並みが触れる。

「おい！！」

引きずり出すと慌てたような顔をしたルーが出てきた。尻尾をつかんだのですぐに不機嫌のような顔に変わったが。

「って、誰なんだコレは！！」

・・・ナツ、どう考えても人じゃねえだろ！！

「マスター！！何なんですかコレ！！」

「おそらく・・・ゼレフの・・・生きた魔法じゃ！！」

「生きた・・・」

「 「魔法！？」 「 「

魔法が！？ルーの推測は当たってたのかよ！！出てきた煙は空中に魔方阵を描きながら、みるみるナニカの形をとっていく。

枯れ木そのもののような手足。不気味に空洞が開いている体。見上げなければ視界に収められない巨大な体。つまりコレが……。ララバイ本体！？

「でええええええええええデカイ！！！！！！」

「おい！！ナツ！！突っ込むとこそこか！？」

ベシンと頭をはたきながら飛び退る。さすがにマスターたちも緊張……してんのか！？後ろにさがってニヤついてるし……。

「で……？どうするよ……コレ」

「どうするって言ったってな」

ほんとどうすつかねー。

と、俺たちが思案していると向こうがまた口を開いた。

「さーて……どいつの魂から頂こうかなア」

……魂って喰えるのか！？あれ？魂って抜かれると死ぬんじゃないのか？

「おい！ナツにゼル！魂って喰えないし絶対うまくないからな！！間違えんなよ！！」

「「そうなのか!？」」

「アホかおまえら……………」

「二人とも……………」

あゝ、ルーシィはともかくルーやら 그레이に言われると無性に悲しいんだが。ま、どうでもいいか。とりあえずララバイを倒そう。

もうすでに攻撃を仕掛けた騎士団の皆様方に対して、威嚇のつもりか知らないが山を消し飛ばしてるし。

「おい!エルザ!」

「ああ、わかっている!!行くぞ!!」

エルザ、 그레이、 ナツが地面を蹴る。ルーシィは後ろに下がる。(

もう星霊が出せないらしい)

俺?俺は翼を生やして空に飛び上がる。そのまま頭上に魔力を集め、銀色の円盤を作り上げる。

「うらああああああ!!!!」

支えられるギリギリの大きさになった時点で手を離してぶん投げる。そのまま円盤は回転しながら、ララバイを斜めに切り上げる。

「うおっ!!ゼル!危ねえよ!!」

「悪い!」

円盤が危つくナツの横を掠めた。エルザは天輪の鎧の姿でララバイに次々と切りつける。

グレイもアイスメイクを槍にしたり礫<sup>つぶて</sup>を投擲する。

「なあ、ゼル。一つ聞いていいか？」

「ん？なんだ？」

俺は、ブーメランのように戻ってきた円盤を再び投げながらルーに答える。

「ララバイって笛だよな？」

「どう見ても今は笛に見えないが笛だぞ？」

「笛ってさ、穴が余分に開いたりすると音が出なくなるよな」

現在、俺たちはララバイにポコポコ穴を開けている。もしかしてもしかすると……音がでなくなるのか？

そう俺が呟いた瞬間、俺たちの攻撃に我慢できなくなったララバイが呪歌を奏でようとした。

空中に先ほどとは比べ物にならない巨大な魔方陣が展開される。それが不気味に怪しく光り、ララバイの周辺の草木が枯れていく。

（命を吸ってるのかよ……）

ララバイが天を仰いで、高まった魔力で旋律を放とうとした瞬間！！

スカ~~~~~

と間拔けな音が響いた。

「は？」

「……予想してたとはいえ何なんだコレは……」

「……！！……ゼル、笑っていいか？」

「ルー、俺にそんなことを聞く時点でアウトだろが。いや、俺も拍子抜けだけどさ……。散々ひっぱといてこのオチか！！」

「エルザー、 그레이ー、 ナツー、 ちょっと離れてくれー」

もう、図体頼みでララバイが暴れ始めてるし……。全力で魔法を落として、消し飛ばそう。

両手を広げて胸の前で合わせる。それにあわせて魔力が高まるのを感じる。

「とりあえずの……。銀竜の双撃！！！！！！」

結構本気の俺の一撃が、ララバイの両腕を切り落とし、そのままあたり一面を光で覆った

## 16話

### 「ララバイ本体ご登場」(後書き)

ゼル……。なんでこんなに天然になっちゃったんでしょう……。

駄文警報です……。

あ、番外編ですが、特に応募がございませんでしたので私の別の連載小説のキャラを引っ張ってくることにします。(とある魔術の禁書目録の二次小説です。)

17話

「それから後」

（前書き）

しばらく空けていて申し訳ございません。

しかし最近学校が忙しくなってきたため、更新は十日に一度くらいになるかもしれません。

それでもでも続けては行きますから！！

17話

「それから後」

ララバイを覆った光は少しずつ晴れていく。俺は空から砂煙の中心に向かって叫ぶ。

「おい。全員大丈夫か？」

まあ、全員の魔力反応もあるし大丈夫だとは思っただけ。

「……お前はアホか……！！！！！！」

「……」

「ゼル、今のはいくら俺でも突っ込むぞ。この魔力バカ

が……！！！！！！」

耳が痛い。全員一致で俺がバカという評価が下っているらしい。

「あのな、お前は、日光とか月光を“食って”魔力回復をするのは知ってるよ。だからお前の魔力が大きいのは知ってるよ。そしてそして！さっきエリゴールの魔力を吸収したのは知ってるよ。……・だからってなあ」

俺が翼を消して地面に降下を始めると、肩に乗ったルーが説教モードに移ってしゃべりだした。

いや、さすがに魔力をこめすぎたのに自覚はあるけどさ、ララバイなら跡形もないじゃないか。

「確かにお前の魔法でララバイ“も”跡形も無くなったよ……」

俺はルーが強調した“も”の意味を考えながら降下を続ける。  
あたりの砂埃が晴れてくるにつれ、俺はルーの“も”の意味がわかった。

「うわ………」

粉塵がはれた先にあるのは、クレーターみたいな大穴。定例会の会場があつた付近もクレータに飲み込まれている。

「要するにお前の魔法が、ララバイごと定例会会場まで吹き飛ばしたと……そういうことか？ゼル？」

「エ、エルザ？何で剣を出してんの？」

「ゼル！やつばすげえな！！」

「アイ！ナツウ、それを言うとおイラが……イテッ！！」

「バカナツ！！どこがすごいんだ！！」

「何するんだよ〜ル〜！！なんでオイラを叩くの〜」

「叩きやすいからだ！！」

「ヒドイよ〜」

「ゼルもバカなのね……」

「それがゼルだ！！」

何かもう誰が何を言っているのかわからない状況だ。だが、とりあえず俺が気になるのは俺の目の前で、換装した剣を握り締めているエルザのことだ！！そのとなりに抜け殻状態のマスターまでいるし。

「ララバイを倒したのはさすがと言っべきだ……。だが！！この有様はなんだ！！」

「この有様って……。。」

「フオフオフオフオ……。どうすりゃいいんじゃあ！！定例会会場が消えとるう！！」

消えてますね……。はい。でも今回は前みたいに凄まじく自然破壊とかはしてないぞ！！魔法を直下に投下したから被害は……。・定例会会場地下……。何メートルだ？……。そこが見えない。

「ゼル！！私はいつも言っているだろう！！魔力のコントロールを身につけると！！なのにコレはどういうことだ！！」

「エルザ……。おまえがやってもこんな感じになったんじゃないかなーと俺は思っただけど」

「問答無用だ！！」

うわ！！エルザの剣が、俺の顔すれすれで止まった。ついでに俺のペンダントから障壁も飛び出す……。俺が無意識に危険を感じたからか？

いや、だってエルザの顔恐いんだから……。。

って次々に剣や鎧を換装するな！！

「いやだつてお前たちも結構ララバイをボコボコにしてなかったか？あのままやってたら絶対被害はひどくなったと思うんだけど！！」

「い・ま・は・お前のこの魔力コントロールが問題だ！！」

絶対理不尽だ。エルザだつて辺りかまわず破壊しまくるくせに！！

「どうすりゃいいんじゃ〜！！！！会場が消えてしまったぞ〜！！」

マ、マスター？口から何か出てますよ！？

・・・・・・もう、わけわかんねえ〜！！

結局そのあと、口から何か始めているマスターと、呆けかけているルーシィと、呆れ顔のグレイと、いつものように笑っているナツと、未だに剣を握り締めているエルザたちと一緒に俺たちはギルドに帰ったのだった。・・・ハッピーとルーはそれぞれ俺とナツの服の中でぐっすり眠っていた。

そしてそれからしばらくたったある日の午後、俺とルーはギルドの屋根の上に腰掛けている。

「なあ、ゼル」

魚の干物を齧りながらルーが聞く。

俺は魔法の糸で綾取りをしながらそれに答える。

綾取りなんて絶対やりたくないんだが、綾取りでもして魔力のコントロールを身につける、ということでエルザに決定された。

「ん？なんだよ？干物ならそれ以上食うなよ。お前の食費がかかりすぎてんだよ。それが精一杯だ」

「違うわ！」

ルーに干物でまた叩かれた。食費のことでないのなら何だってんだよ。

「お前だってナツに勝負持ちかけられただろ？屋根の上でノンビリしてていいのかよ？」

「あ？        ああ、勝負ね。今回は俺は審判役で、一週間後にナツと戦うんだ」

連続で戦うと町が壊れるので分けて勝負しろ、ということだった。  
・  
・  
・  
だったら最初から街中でやらなきゃ良いのでは？

「一番、町を壊しかねないお前が言っな」

「いや、そりゃそうなんだけどさ。今日は俺、審判役、兼、町の保護係だから」

「保護係イ？」

語尾を跳ね上げてまで驚くことかよ。俺の障壁が頑丈だからって言うんで、ナツとエルザのバトルフィールドを囲ってことなんだよ。ペンダントのほう魔法の発動が早いので、障壁魔法を込めて今、首から提げている。

「ま、確かに勝手に感情一つで発動するペンダントのほうが発動は早いわな。魔力を形にする必要が無いんだから」

「……昨日障壁魔法ばかり込めすぎたせいで、こっちは魔力不足だよ」

「自業自得だ。日光でも浴びとけ」

なんだとこの野郎！

俺がルーとつかみ合いかけると、後ろから声がした。

「あんたたち、仲いいわね」

俺たちが同時にああ？と振り返ってみると、ルーシィとグレイが立っていた。って、また脱ぐのかよ、グレイ。

「今日はエルザとナツの勝負よね。どっちが勝つと思う？」

「俺はエルザだと思う」

「同じく」

「あんたたち、即答するのね……」

昔のナツはエルザにボコボコにされていたからな。俺としてはそのときの印象が強いんだよ。

それにナツが強くなったといっても、実際まだエルザの領域ではないと思うし。

「そういえばゼル。お前も一週間後に勝負するんだろ？どうなんだよ？」

「どうってなあ……。ま、負けたくは無いな」

俺だって今までナツと勝負して負けたことは無い。だから今後も絶対負けたくは無い。

「そういえばゼルって、いつフェアリーテイルに入ったの？」

「六年くらい前……。かな」

今俺が十六歳で入ったときが十歳だからな。そんなもんだな。

「そんなときはゼルって何にもしゃべらなかつたんだぜ？」

ルーが俺の頭の周りをヒラヒラ飛びながら言った。その通りだけどうるさいな。あの時はあの時なんだよ。

「表情があんまり動かないから、つまらないってナツがケン力をふっかけたりしてな」

「そのケンカもナツがボロ負けしたけどな」

「ナツって変わってないのね・・・」

そういえばそうだったっけな。

六年前か。

### 三人称SIDE

六年前。

フェアリーテイルのリクエストボードの前に一人の少年が立っていた。ポケットの手を突っ込んで、リクエストボードを見上げている。しばらく思案するように首を傾けていた少年だったが、やがて“魔獣討伐”と書かれた依頼書に手を伸ばした。

が、その依頼書は突然横から伸びてきた手に破り取られる。破り取ったのは少年　ゼル　とそう変わらない年に見えるサクラ色の髪の少年　ナツ　だった。

ナツはいかにも得意そうに依頼書を振るのだが、ゼルは視線を動かしただけで、またリクエストボードに向かい合った。そしてこんどは“盗賊退治”と書かれた依頼を破りとって去っていった。

後に残されたナツはおもしろく無さそうに依頼書をカウンターに出す。

「まゝた無視されたんかよ。ナツ」

そんなナツに 그레이が声をかける。上半身は相変わらず何故か衣類を纏っていない。

「うつせえな！変態！！ 그레이だって前無視されてただろ！！」

「んだとコラ！！」

そのまま相変わらずケンカに発展する。そしてその結末も、いつもの通りエルザの力ずくの介入になった。

「放せよ！エルザ！！」

「そうはいかん！！お前たち、仲が言いにしてもやりすぎと言つものがあるだろう！！」

「これこれ、エルザ。いい加減にせんか」

ナツと 그레이の襟首をつかみ上げたエルザに声をかけたのは、カウンターに座った小さなギルドマスター・マカロフだ。

「そついやじつちゃん！！あのゼルってやつ何なんだよ！俺と同じドラゴンスレイヤーなのに全然ドラゴンのこと、知らねえし！！」

「おお、ゼルか。お前たち仲良くしとるか？」

「マスター、私も話しかけてみましたが、無視というより反応がなかったと言う風でした。どういふ者なんですか？」

マスターはふうむ、とヒゲをなでる。

「あいつはの、いきなりギルドの前に倒れておったんじゃよ。ナツと同じようにドラゴンを探しておるようじゃったのにお……」

「はあ？倒れてた？」

「行き倒れておったのを、ラクサスが拾ってきたようなものじゃ」

行き倒れて……と絶句のナツたち。そんなナツたちをちらりと見て、マスターは更に言葉を続ける。

「確か結構強かったのにお……。ラクサスとも勝負させられておったが負けなかったし」

反応が無いとは困ったのお……。と呟くマスター。  
だが、ナツはそんなことは聞いておらず、瞳をきらめかせていた。

「じつちゃん！俺、ゼルと戦ってくる！！あいつ、どこ行っただ  
？」

「確か……ミカズ山の盗賊退治じゃな」

おっしや〜！待ってるよ〜！とナツとグレイは叫びながら、ギルドを飛び出していく。

それを見てエルザはポツリと呟いた。

「マスター、これを狙っていませんでしたか？」

「……………」

マカロフは答えず、ただにやりと笑っただけだった。

## 17話

「それから後」

（後書き）

今回は場面がいきなり飛ぶと言ったことをやりました。

感想よろしくお願いします。不備な点の指摘もよろしくお願いします。

## 18話

ちょっと前のこと（前書き）

文章量が安定しておりません。

駄文です。

## 18話

### ちょっと前のこと

三人称SIDE

フェアリーテイルのギルドがある街、マグノリアから出てしばらく歩いたところに山がある。

名前はミカズ山。二、三ヶ月前までは町の人間も簡単に登れるような山だった。

だが、どこからとも無く盗賊が流れつき、住み着くようになった。騎士団が出動しても盗賊の中には魔道士が数名おり、あっさり撃退される。

そして困り果てたマグノリアの人々と、街道を満足に通ることができなくなった商人ギルドがフェアリーテイルに依頼してきたのだ。

その依頼を受けた少年は、ミカズ山の麓にたったいま到着したところだった。

ゼルSIDE

高い、暑い、遠い。おれがミカズ山にたどり着くまでに感じたことはそれだ。

二、三ヶ月前。盗賊が住み着くまでは多少なりとも季節になれば花が咲き乱れ、鳥がやってくるふつうの山だったらしい。

だがおれは山が視界に入るようになったとたん、その情報を信じる気が無くなった。

どうぶつの声が無い。鳥のさえずりが無い。要するに静かすぎる。

はあ。まじゅう退治にすれば良かったかもな。ま、仕事を選んだ以上はきつちりやらないといけないけど。

「あ、いたいた！！おゝい！そこのおまえゝ！」

確か、この声は・・・“なつ”だったっけか？ああ、おれが最初に受けようとしたクエストを持っていった奴か。“火のドラゴンスレイヤー”だっけ。強いんだろうな。

「おゝいつてばー！！」

まあ、おれにはあんまり関係ないけど。とつとといらいを片付けて帰ろう。

「無視するな、コラア！！おまえのことだよ！！」

後ろから飛んできた蹴りを避けて、おれはまた歩き始めた。

おれは早く仕事を終わらせてしまいたい。それで帰って寝たい。昨日“らくさす”に無駄に勝負に付き合わされて、まりよくがあんまり無いんだ。現在進行形で日光を吸収しているとはいえ。

「こら！ゼル！！無視すんじゃない！火竜　　ゴブウ！？」

「別に、おれ、は仕事の、邪魔を、しない、で、ほしただけ、だ」

いくらなんでも“なつ”のまほうをくらうのはごめんだ。ちょっと軽く殴るくらいは良いだろう。それにおれはしゃべるのが苦手だし。行動で示したほうがわかりやすいのだ。

「だらしねーな。ナツ。なぐにやってんだ？」

「うるせー、この氷野朗！！」

なんかもう一人黒い髪のがやつがでてきた。確か“ぐれい”だったっけ？氷のまどうしだったか？あれ？なんでこいつらいるんだろ？・  
・全然わからない。“なつ”はまじゅうクエストに行ったんじゃないやなかったっけ？行かないのならそっちと交換してもらえないだろうか？

「だいたいなんでお前まで来てるんだよ！ 그레이！！」

「俺だってゼルと勝負したいからに決まってるんだろ！！」

「何〜！それは俺が先だ！！」

・・・・もう先に行っておこう。あ、でもここで騒いで盗賊に見つかりと面倒だからそれだけは伝えておこう。

「おまえ、ら、ここ、盗賊の住んで、るところ。だから、そんなに、騒ぐ、と危ない」

これだけの言葉を伝えるのもやりにくい。なんかギルドに行くまえの“おれ”というのは言葉を話す機会がなかったんだろつか？おれはそれよりまえの記憶がないからわからないんだけど。

「元からお前は気に食わなかったんだよ！」

「上等だあ！ナツ！」

こいつら仕事先っていうじかくはあるのだろうか？だからギルドで“えるざ”に叱られるんだろーな！。“らくさす”は相手にされていなかったけどー。

もう心の声がぼつよみになってきたように思う。・・・よし！この二人は置いていこう！大丈夫だろう！多分！

そうときめたら早く行こう。さっそく背中にまりよくで羽を作り、浮かび上がる。まりよくのコントロールがまだじょうずにできないからそんなに持たない羽だが、そういうことをいつている場合ではないし。

おれが羽で浮かび上がるのはさすがに気づいたらしく、“ぐれい”と“なつ”が何か言ってるが気にしない。

「とりあえず、そこ、が危ない、こと、は忠告した。じゃあ、また」

あーあー、後ろのことなんて聞こえないー。

「ってちよつと待って待って!!」

「ん？何だ？ルーシイ？」

ギルドの屋根に腰掛けた“俺”は、突然声を上げたルーシイに視線を向けた。

「今、話してたのって六年前のことなのよね？」

・・・最初に言っただろ？それがどうかしたのか？

「じゃあ、ゼルって記憶が？」

「ああ、その通りだぜ？俺、十六歳だけど、十才までの記憶がナイんだ。なんか自分の年と名前と魔法のことだけは覚えてただけだな」

俺がそういいながらゴロリ、と屋根の上に寝転がるとルーシイが悲しそうな、いやちよつと違うかもそんな顔をしていた。何かそんな顔をされるのはいやだな。

「そういうことから、俺はドラゴンの親を探すこともあるんだけど、記憶も戻らないかなーってことで当時はギルドに入ったんだ」

「結局、まだ戻ってないけどな」

うるさいなルー。ヒゲむしるぞ！また、俺がルーに飛びかかると今度はグレイが声を発した。

「おい、エルザとナツが出てきたぞ！」

お！出てきた出てきた！！それじゃ俺は障壁をいつでも出せるように構えてっとお！！  
何か、前も思ってたけどどっちが勝っても負けてもホントにいい勝負になりそうだな！！  
楽しみだ！！

## 18話

### ちょっと前のこと（後書き）

軽くスランプです。

GWですがいまいち更新はできません。申し訳ございません。

指摘・感想等々お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6521p/>

---

F A I R Y   T A I L   ~ 魔道士ギルドの一人の少年 ~

2011年5月5日16時01分発行